

針葉樹会報

第 118 号
2010 年 6 月



目次

イタリア 講演旅行	中村										
蕪村山河の句	加地										
私の現役時代	石										
夏の終わりの加賀の白山	竹中										
インドヒマラヤ放浪の旅	佐藤										
ヒマラヤ・トレッキング	岡田										
錦秋の藏王連峰縦走（北藏王・南藏王）	健志										
九州の山々及び西九州のクライミング事情	中村 雅明										
奥三河／厚血川ゴルジュ溯行：山田 田形	久尚 彰										
トピック	弘光										
三月会通信	幸雄										
編集後記	保										
表紙写真＝怪峰シブリング（左）とメルー（右）											
撮影・佐藤久尚											
36	32	30	28	26	23	20	14	12	8	6	2

発行日	2010 年 6 月 22 日	編集人	小島 和人
発行者	針葉樹会報 (会長 竹中彰)	〒	241-0817
印刷所	ヤマノ印刷㈱	横浜市旭区今宿 2-60-1	会報幹事／小島和人、井草長雄 川名真理

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

イタリア 講演旅行

(2010年4月19日～5月15日)

中村 保 (昭33年卒)

イタリア講演旅行をリポートします。トリノのイタリア山岳会では期せずして日本山岳会を代表してレクチャーをすることになりました。4カ所での講演を終えて振り返ると、イタリアには登山文化が風化せずにしっかりと根付いているのを知ったことの意義は大きく、多くの新しい友人を得たことも得がたい収穫でした。

歐米でのイベントに出席し、講演をするたびに感じることは、いつも「一人旅（日本人一人）」であることです。そのことを歴史家・金子民雄さんに話したら「これまでの私の乏しい経験でも海外での発表の場合、日本人はたつた一人というのが多く、自分が日本人であること忘れます。それでも疎外されたり、排除された経験がなく、むしろ帰国してからの方が孤独に感じます。……最近の日本人はすっかり消極的になり、海外への関心が薄れ

ているような気がします」とお手紙を頂きました。全く同感です。

最近若手の気鋭クライマーが海外のクライミング・フェスティバルに参加し、昨年はフランスの「黄金のピツケル賞」を受賞し、久しぶりに日本の存在感を示した（Doug Scottが絶賛していた）ことはたいへん明るいニュースだが、單発的で総じて日本からの発

信は少なく、海外の登山界から孤立している状況は変わりません。そのことが日本登山界の低調の一因かもしれません。日本登山界の再生を願うばかりです。



レッコの街頭に掲げられた、中村さんの講演を告知するポスター（右は中村夫人）

今回のヨーロッパ旅行の目的はイタリアでの「ヒマラヤの東チベットのアルプス」の講演でした。そのきっかけをつくってくれたのが、湖水地方・コモ湖の東端の Lecco にベースを置く「The Spiders of Lecco」（イタリア山岳会 Club Alpino Italiano = CAI の有力支部）と関係の深いイタリア最大手の登山アウトドア用品販売会社です。

Lecco は『大岩壁の50年』のリカルド・カシンの根拠地で、イタリアで最も多くの優れクライマーを輩出していると聞きます。その販売会社「Sport Specialist」のコンサルタントで、Lecco で出版されている山岳誌「Stile Alpino」の編集にも携わっている Fabio Palma さんが小生の招聘を進めてくれました。「Sport Specialist」はイタリアの8カ所で巨大なアウトレット・モールを開設し、ヨーロッパで唯一、毎月山岳関係の講演者を招待しています。社長の Sergio Longani さんは登山家でもあり、地方の名士でもあります。

Fabio さんが小生に目をつけたのは日本山岳会の英文誌“Japanese Alpine News”や海外のジャーナルへの寄稿、および拙書“Die Alpen Tibets”です。英文で海外に発信を始めてから12年、ようやく欧米に「ヒマラヤの東チベット



スポーツ・スペシャリスト社での講演

バルに招聘されています。その後もスペインのバルセロナから招待されています。このあたりも「未知の世界・探検」への希求が日本より強く感じられ、伝統的な登山文化が継承されている土壤があるからでしょう。

4月22日に Lecco で2回の講演をしました。午後に「Sport Specialist」の本社で30名ほどの気鋭のクライマーに「2009年秋の東チベット踏査行」の講演をし、夜は巨大なアウトレット・モールで400人を超える聴衆を前に3カ所のスクリーンを使って「チベットのアルプス」のスライドショーをしました。これほど多くの人に熱心に見てもらつたのは初めての経験です。感動しました。日本では想像もつかないことです。

4月22日に Lecco に引き続き、トルリノの山岳博物館に本拠を置くイタリア山岳会での講演もアレンジしてくれました。山岳博物館としては世界一と彼らが自慢する「Museo Nazionale della Montagna Duca degli Abruzzi CAI Torino」を館長さんの案内を見学し、充実した CAI の図書館も訪れ Die Alpen Tibet を寄贈しました。講演は4月23日の夜、博物館で行われ、80名ほどの出席者でした。期せずして日本山岳会を代表する形での開催される第12回世界探検家フェスティ

バルに招聘されています。その後もスペインのバルセロナから招待されています。このあたりも「未知の世界・探検」への希求が日本より強く感じられ、伝統的な登山文化が継承されている土壤があるからでしょう。

4月22日に Lecco で2回の講演をしました。午後に「Sport Specialist」の本社で30名ほどの気鋭のクライマーに「2009年秋の東チベット踏査行」の講演をし、夜は巨大なアウトレット・モールで400人を超える聴衆を前に3カ所のスクリーンを使って「チベットのアルプス」のスライドショーをしました。これほど多くの人に熱心に見てもらつたのは初めての経験です。感動しました。日本では想像もつかないことです。

可能な Fabioさんは Lecco に引き続き、トルリノの山岳博物館に本拠を置くイタリア山岳会での講演もアレンジしてくれました。山岳博物館としては世界一と彼らが自慢する「Museo Nazionale della Montagna Duca degli Abruzzi CAI Torino」を館長さんの案内を見学し、充実した CAI の図書館も訪れ Die Alpen Tibet を寄贈しました。講演は4月23日の夜、博物館で行われ、80名ほどの出席者でした。期せずして日本山岳会を代表する形での開催される第12回世界探検家フェスティ

バルに招聘されています。その後もスペインのバルセロナから招待されています。このあたりも「未知の世界・探検」への希求が日本より強く感じられ、伝統的な登山文化が継承されている土壤があるからでしょう。

4月22日に Lecco で2回の講演をしました。午後に「Sport Specialist」の本社で30名ほどの気鋭のクライマーに「2009年秋の東チベット踏査行」の講演をし、夜は巨大なアウトレット・モールで400人を超える聴衆を前に3カ所のスクリーンを使って「チベットのアルプス」のスライドショーをしました。これほど多くの人に熱心に見てもらつたのは初めての経験です。感動しました。日本では想像もつかないことです。

可能な Fabioさんは Lecco に引き続き、トルリノの山岳博物館に本拠を置くイタリア山岳会での講演もアレンジしてくれました。山岳博物館としては世界一と彼らが自慢する「Museo Nazionale della Montagna Duca degli Abruzzi CAI Torino」を館長さんの案内を見学し、充実した CAI の図書館も訪れ Die Alpen Tibet を寄贈しました。講演は4月23日の夜、博物館で行われ、80名ほどの出席者でした。期せずして日本山岳会を代表する形での開催される第12回世界探検家フェスティ

4月22日に Lecco で2回の講演をしました。午後に「Sport Specialist」の本社で30名ほどの気鋭のクライマーに「2009年秋の東チベット踏査行」の講演をし、夜は巨大なアウトレット・モールで400人を超える聴衆を前に3カ所のスクリーンを使って「チベットのアルプス」のスライドショーをしました。これほど多くの人に熱心に見てもらつたのは初めての経験です。感動しました。日本では想像もつかないことです。

ちなみにイタリア山岳会の現在の会員数は約30万人、英国 Alpine Club の系譜から外れて、クラブというよりはドイツ山岳会（会員70万人）のように協会的な運営をしています。伝統に固執し時代の流れに対応できない集団であるとの批判の声も聞かれますが、支部の活動は活発であり、トレントのフィルム・フェスティバルを支援するなど精力的に活動しています。日本のようにアルピニズムの原点が忘れられていることはなさそうですね。日本山岳会の他に複数の協会・連盟が並立しているようなことはないようです。これはアメリカでも英國でも同じです。

レクチャーになり、帰国後イタリア山岳会会長からお礼のメッセージが届きました。

博物館はポー河を見下ろし、トリノの街の彼方にアルプスを望める絶好のロケーションにあります。150年ほど前に修道院だった建物を利用し、アルプスの展望台を兼ねて博物館が造られたと館長さんが説明してくれました。

ア山岳会創設直後の1863年につくられました。イタリア山岳会は1866年には英國アルパインクラブと友好関係を結び、以後海外の山岳クラブとの連携を深め図書館の充実を図つてきました。現在の図書館は2003年に歴史的な「トリノのMonte dei Cappuccini修道院」につくられたアルプスの展望台をかねるアブリツチ公記念山岳博物館に移されました。

イタリア山岳会のすべての支部図書館の重要なお手本となつていて、1万6500冊のジャーナルを含む4万冊以上の蔵書があります。電子化も進んでいます。カナダから日本まで世界のジャーナルが集められています。歴史的に価値の高い資料が収集されていることは言うまでもありません。

山岳会やクラブの最も大事な使命・役割のひとつが図書館と良質のパブリシティです。ところが現在の日本山岳会はこれを軽視しています。図書館の充実とは逆行して貴重な資料を平気で外部に流失させようとしています。イタリアを含め海外のクラブの図書館の充実ぶりと日本山岳会の図書館に対する姿勢と比べて羨望を禁じえません。電子化についても同じです。アメリカン・アルパインクラブや英國アルパインクラブと比べると日本山岳会はたいへん後れています。

トリノは19世紀後半までイタリアの首都だつたといふで、歴史的建造物の多い、良い街です。少し前に世界フィギュア選手権大会で浅田真央が金メダルを獲りましたが、そのことを訊いても殆どの方が知りませんでした。日本とのギャップを感じました。

また、トリノでは1961年ペルーアンデス・コルディエラブランカ遠征のときに、リマで知り合つたイタリア・ベルガモ隊のメンバーであったGiuseppe Garinoldiさんと半世紀ぶりに旧交を温め、ボーゲの辺で昼食をとりトリノ市内を案内してもらいました。80歳になる温厚なGiuseppeさんは2001年まで山岳博物館の館長を務めた人で、多くの写真集を出版、その中の一つに小生の念青唐古拉山東部の写真を掲載してくれています。時空を超えた山仲間の付き合いは素晴らしいです。

ペルーのリマで別のイタリア隊のワルテル・ボナッティーとアンドレ・オジョニ（帰国後にモンブランのフレネイ山稜で遭難死）との出会いなどの話に花を咲かせました。

トリノの後はアオスター、クールマイユール、モンブラントンネル、シャモニー経由でスイスに入り、オーストリアを通してイタリアのドローベテに3日滞在しました。ドローベテでは

出版社のペドロさんと英語版の打ち合わせもしました。

ドローベテの玄関口、ボルツアーノからは鉄道の旅でした。75歳と71歳の老夫婦には重いスーツケースを持ってプラットホームの低い駅で何度も乗り換えをするにはかなり苦労しましたが、水の都ベニス、ロメオとジュリエットのベローナを観光し、次の講演場所に向かいました。

5月3日ベローナからローカル線を乗り継いでベルガモ北東のイタリア・アルプスを望む避暑地（ミラノの金持ちの別荘が多い）に行き、そこで講演をしました。ソンガバソソという600人ほどの小さな村の大きなレストランが会場で100名ほど集まってくれました。スライドショリーの後は豪華なフルコースのディナー（障害者支援のチャリティーでもあつた由）で夜の12時近くまで賑わいました。楽しい集いですが、いつも日本人一人、疲れます。翌朝ソンガバソソから講演のメインイベント「第58回Trento Film Festival」の開催地である北イタリアの古都トレント（ベローナとボルツアーノの中間）に向かいました。



イタリア山岳博物館

から提供され、ブックフェアには08～09年の新刊本とジャーナルが紹介されていました。トレントの街はフェスティバル一色で、街角にはいたるところで案内板が目にとまりました。イベント会場は数カ所に分かれています、催しにより場所が選ばれていました。映像では「ヨセミテ・ハーフドームの記録的な登攀」など、講演では小生の「ヒマラヤの東チベットのアルプス」の他に、ポーランドのKrzysztof Wielickの登山体験、座談ではKurt Diemberger, Krzysztof Wielick, Con Nives Meroi, Ang Tshering Sherpaの4人の「ヒマラヤの魅力を語る」が注目を集めています。

ブックフェアには日本からは小生が送付した日本山岳会の英文ジャーナル『Japanese Alpine New 2009』、『山岳2008, 2009』と中国四川省在住の大川健三さんの美しい写真集『蜀山女神（四姑娘山山塊）』の3種類だけが展示されていました。山と渓谷社と東京新聞『岳人』に出版を促しましたが、無関心でなんのアクションも取らなかつたようです。こんなところにも日本がいかに世界の登山界から孤立しているかが窺えます。残念なことです。ブックフェアも始めました。ドロミテの玄関ボルツァーノとトレント市の市議会とイタリア山岳会がパートナーとして企画・資金集めを担つてきました。今年は若手のイベント関係者と登山家のチームが協力しプロジェクトの設計・遂行にあたつきました。

新しいフィルム・映像が350本以上世界文化が息づいていたと感じました。小生のドイツ語版 Die Alpen Tibets のイタリア語版の話も持ち込まれています。

Trento Film Festival での私の講演は5月5日に行われました。静かなよい雰囲気のなか80名ほどが熱心に耳を傾けてくれました。Kurt Diembergerさん夫妻、Ang Tshering（元ネペール登山協会会長）さんも見にきてくれました。（ここにも英文ジャーナルと『山岳』が展示されていて日本山岳会に対する気配りを感じました。英語－イタリア語の通訳にはLeccoからFabioさんがきてくれました。彼はプロの通訳ではありませんが、聴衆の気持ちを掴んだいい通訳をしてくれました。

講演に先立つて3回のメディアとのインタビュー（新聞・テレビ・インターネット）がありました。インタビューに際していつも感じたことですが、難しいのは東チベットの地政学的、文化的かつ歴史的背景を理解してもらうことです。登山探検に関わることでは、スライドショーの始めに解説することですが、「チベットのアルプス」にはまだ250座以上の未踏の6000m峰が残されており、世界に残された最後のフロンティアであることを強調して、この山域の吸引力をアピールします。そして、チベットのアルプスは登ること以前に許可を取ることが厄介であり、中国側

からみて東チベットの登山・踏査は売り手市場なので値段の交渉がきわめて難しいとも付け加えます。

夜には Fabio さん、Kurt さん夫妻、Ang Tshering さん、イタリア・スポーツクライミング協会の名誉会員（女性）を日本料理に招待し和やかにトレントでの滞在を締めくくりました。Kurt さんは数年前に日山協の海外登山研究会で一緒に講演して以来の付き合いでも、娘さんがチベット研究家でケンブリッジ大学に席を置いていることもあり、親近感を感じています。トレントの後 Kurt さんはダウラギリ I 峰初登頂 50 周年祝賀行事に招待されて 21 年ぶりにネバールに出かけました。

イタリアでの講演をつつがなく終えてフランスにも行きました。「チベットのアルプス」の次のテーマである雲南・東南チベットへのフレンチ・ローマン・カトリックの宣教の足跡、苦闘の歴史の研究に関連し、パリ外国宣教会を訪れました。フランスでは観光もかね、帰路ローマに滞在しバチカンやナポリ・ポンペイの遺跡も見物しました。
最後に恥ずかしい話ですが、旅の出だしでは難儀しました。4月19日、アイスランド火山噴火の影響が収まらぬなか、アリタリア航空

空だけが飛び立つましたが、噴煙を避けるため飛行ルートを南に変更、ミラノに下りることができず、ローマに着陸しました。ミラノへは鉄道特急で 3 時間強)で行くことを余儀なくされ、ローマ駅の雑踏の中で家内がスリに遭い大金（15万円相当ユーロ）とクレジットカードを盗まれてしまい、前途多難かと憂いましたが、Lecco での予定の講演にはなんとか間に合い、後はすべて順調でした。

春の水は、濁つた雪解けの水、そこに流れ込む清水の様を目にとめた句です。始めは澄んだ水が濁水を圧しのけますが、それも束の間、清水の流れが消えて終います。春山下山中などに一見しますね。

瘦臍の毛に微風あり更衣

加地 幸雄（昭33年卒）

更衣は、冬着を夏着にかえることで、昔は陰暦四月一日に綿入れをぬぎ替に着更えるのがしきりでした。岳人には体温調節が大切ですから、一日数回広い意味での更衣をすることになります。歩き出しは寒くとも、二十分後にはあついので、ズボンをショーツに替えようとか。その経験を臍毛に微風の感触で受け止めたのは、流石蕪村ですね。芭蕉にも佳い更衣の句があります。

一つ脱^{ぬい}でせなに負けり衣がへ

不二ひとつうづみ残してわかばかな

このわかばは近景でしょうか、遠景でしょ

これきりに僕尽^{こみらつさ}たり芹^{せり}の中

流れ来て清水も春の水に入^{いる}

うか。「うづみ残して」ですから遠景でしようね。

裾野に広がるみずみずしい緑の樹海、その上に聳え立つ冠雪の富士。青い空、緑の樹海、その間の雪山の輝き、画人蕪村だけあって、絵画的ですね。

絶頂の城たのもしき若葉かな

「絶頂」という固い感じの漢語と「たのもし」の和語がよく呼応し、青空、白亜の城、黒々とした岩壁、その下の初夏の若葉と、色の対照も鮮かです。

夏河を越すうれしさよ手に草履

本当の岳人は、山靴のままの徒涉わざわたりりでしょ
うが、私はゴム製で穴の沢山あいた草履のよ
うな靴に履き更えます。極く軽い靴です。そ
うすると時間がかかりますが、山靴の中を濡
らさずに済みますし、むれた足が冷えびえと
して快適です。まさに「夏河を越すうれしさ
よ」です。

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

このうれいは望郷の思いでしようか、恋の

悩みでしようか。とにかく、一人で登つて、花いばらの中に「徑尽き」で佇み、小さな白い野ばらの花に慰めを見出したのでしよう。蕪村はロマンチックですね。

おろし置笈おくおいに地震なつ野哉かな

最近半世紀の山具の進歩改善には目を見張るものがあります。背の荷袋もその一例。私達が現役で使っていたのは、片桐のキスリングなど、ぶ厚いキャンバスでできた代物で、最近のナイロンのザックと比べると、三、四倍の重さです。しかし、芭蕉や蕪村が「長途行脚」に使っていたのは、勿論キスリングではなく、笈と呼ばれる長方形の木箱です。前に肩ひきが双ふたつ、下に短い足が四つ、後に戸がついていました。空でもキスリングの三倍位の重さがあつたのではないか。その木箱に色々詰めるわけですから、背負いは苦痛で大変な労力を費やしたことでしょう。芭蕉も「瘦骨の肩にかかる物先まへくるしむ。」と実感を記しています。蕪村の句は、丁度野原にさしかかって骨休めしようと笈を落した時、地震にあつたと云うのです。肩引きが「瘦骨の肩」に喰入くいりついていたので辛棒しながら歩いた後の憩いの一時でしたのに、地震とは。

やななまうりしみずかわいしとこうどいろ
柳散清水涸石処々

これは遙か昔の西行の歌

道のべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちどまりつれ

に対応した句。西行の歌は、一時の憩いをと道をはずしたのに、もうその時間も流れ去つて了つたの意。蕪村が六百年後、かの西行の憩いの場に来てみると、昔の「清水流るゝ柳かげ」は今は「柳散清水涸」て無く、あつたのは処々にちらばる石だけだった。いにしへの詩情も涸れ果てて終い、憩なる詩界も消え去つた、と嘆いているのでしょうか。昔を理想化して憧れていた蕪村ですから。しかしこの嘆きが蕉風再興の奮起に繋がるわけです。西行は芭蕉にとつても蕪村にとつても敬慕的でした。

自然の渇渴は嘆かわしい限りです。私も先秋消え行くヒマラヤの氷河の末端を足下目前に見て悲しく思いました。米国モンタナ州の氷河国立公園もあと十数年で氷河が減し、氷河公園とは名ばかりとなるでしょう。しかしヒマラヤの場合は、観光登山問題や感傷どころの話ではありません。何億人、いや何十億人の命を支える農業の水源が涸れんとしてい

るわけですから。

葦狩や頭を擧れば峰の月

この句の中七・下五は、唐の詩人李白の「静夜思」の一節「挙頭望山月」に因つたものです。これを読むと去年の九月、市川陽一君と一緒にある地元の山行を思い出します。一万一千尺の山の中、一尺の新雪に悩まされ予想以上の時間を費し、谷下りの途中にとつぶり日暮れ。ヘッドランプに依つて小径を辿つていると急に明るくなりました。ふと見上げると、丁度右手の稜線の上に満月が出たところでした。まさに「頭を擧れば峰の月」でした。その後一、二時間、車まで満月に案内してもらいました。

黄に染し梢を山のたゞまひ
修行者の徑にめづる桔梗かな
これは芭蕉の私の特に好み

を思い出させます。

山路来て何やらゆかしすみれ草

人を取淵はかしこ歟霧の中

この辺には人の命を取る淵があるはずだが、迷霧で分らない。の方角かなあ。藤村も奥羽辛酸の長旅で、この経験をしたのでしょう。山では勿論、濃霧は暗闇と同様に危険。雪庇を踏み外したり、クレバスに落ちたりする危険は、視覚が効かないとますます増えます。四、五年前コロラド州南部の大陸分水嶺を歩いていた時、強風と雨の中、濃霧にとざされ、難渋しました。南北に平らな尾根歩きでしたが、西側が切れてい、その崖端がどこか分かりません。同行の二人も一、二泊の所にいないと見失いがちですし、声も聞こえなくなります。視界零ですから方向も分りませんでした。まさに「人を取る崖ふちはどこ霧の中」でした。地図で現在地を確認できたのは二日後でした。自己の存在感や人生の方向感覚を失う精神的濃霧の実感を伝える句でもありますね。その隠喩としてこの句を読むと、「人を取」はこわいほど正鶴を射ていると云わざるを得ません。

山行は人生のどのような比喩なのでしょう。

私の現役時代

石 弘光（昭36年卒）

1 入部そして新人時代

1957年4月、一年浪人して憧れの一橋大学へ入学した。桜の花が散り始めた4月のはじめ、入学式で正門をくぐつたら兼松講堂の前は入部の勧説で各部が入り乱れ、大変な賑わいを見せていた。確かにその中で、テントを張った山岳部の受付もあったと思う。大学に入つたら、思う存分山登りをしようと考えていたので、躊躇なく山岳部をたずね入部の手続きをした。受付には澤木さんがいて、出身高校の名を言つたら加地さんの後輩かと親しげに言つてくれたのを覚えている。

数日後、新入生歓迎コンパがキャンパスの林の中にある部室でぎやかに行われた。このころは、山岳部もワングル部の区別もなく、その後誕生した山歩きを楽しむ山友会もなかった時代だけに、山好きな若者が20人近く入部を希望して集まつてきた。その頃、山岳部には各学年の部員は10人前後おり、それに

よく分からぬが留年生の5年部員や6年部員も何人かおり、まさに全盛期の趣を呈していた。狭い山小屋は、人であふれていた。

大騒ぎのコンパに身をゆだねると、自分がやつと大学生になれたとふつぶつと喜びがわいてきたのだ。安酒の洗礼はもとよりのこと、魚屋から買ってきたばかりの生のちくわを丸かじりし、一升瓶を片手にヨカチンを踊る姿は壮観であった。踊っていたのは、当時の山岳部長で、経済学部の関恒義助教授であると聞いてまた驚いた。

このとき集まってきた入部希望の部員を中心には、その学年でヤロー会が生まれることとなる。その後、針葉樹会の中でも5年前に結成されていたオーション会に匹敵する結束の固い同期会へと成長することになる。歓迎登山、5月の谷川岳の雪上訓練、そして夏山合宿と進むにつれ、ヤロー会メンバーも次第に固まってきた。最初からいたのが、中川、山本、大賀、小林（進）、中島、永井、石、そして2年生になつた時に後れて有賀、三股、小林（正）が入部してきたので、計10名となり卒業まで結束固く、山登りを続けてきた。

以下この間、共に過ごしたいくつかの思い出に残る合宿のことを綴ることにしたい。



国立キャンパスの雑木林の中にあった「旧部室」。

2 1957年夏山合宿

当時、夏山の定着合宿は一年ごとに剣沢か涸沢で交互に行われ、その後縦走にてるパターンとなっていた。われわれが入部した1年生の時は、剣沢で定着合宿それから槍山までの縦走が予定されていた。2年生と4年生の時、涸沢で定着それから剣までの縦走、そして3年生の時、再び剣沢で定着、その後、後立山への縦走へと出かけた。

この中でやはり思い出が一杯なのは、19

57年の夏山合宿であった。7月、前期試験が終わるのを待ちかね、われわれは夏山へ向け勇躍、剣岳へと向かつた。その年、新入部員は20名近くが参加したはずである。山岳部全体で、50名近くの部員での合宿となつた。私は、小林（進）こと牛ちゃんと2人、1年生だったが剣沢のテント場確保のために、先発隊として本隊より数日早く東京を後にした。

剣沢での合宿は連日、雨にたたられた。約2週間の定着の間、おそらく3分の2近く雨で、テントでチンドンする日が多くつた。それでもわずかな晴れ間や小雨の折に、新人として雪渓訓練の他に、八つ峰、源次郎尾根、一般ルートからの本峰などで訓練が行われた。その合宿では、チンネ登攀のために三の窓にも前進テントを出してあつた。私は、幸いにも先発隊の特権で、三の窓へボッカをかね長次郎雪渓をつめるグルーブに入れてもらつた。三の窓に3日ほど滞在、その間にサブリーダーの市畑さんに、チンネの中央チムニーに連れて行つてもらつた。生まれて初めての岩登りに、心が躍つたものだ。

合宿中困ったのは、雨の中での食事作りであつた。当時は、石油コンロもなく、枯れ木を集めての薪で炊飯をせねばならなかつた。這松ぐらゐしかない中での集めた薪は生木が

多く、そのうえ連日の雨で湿つており、50人分の飯炊きは大変な仕事であった。われわれ新人は、この厳しい環境の中でしっかりと教育され皆たくましく成長した。このようにして夏山合宿で仲間意識がたかまり、上級生から見ると生意気な「野郎ども」ということになつたらしい。漢字をカナに変え、結束の固いヤロー会が出来上がったわけだ。

昼飯用の乾パンを炊飯が出来ないことから毎食のように食べたため、食糧難が生じ、槍までの縦走を断念。平の渡しから針の木谷に



前列左から、小林進二、石、中列左から、仲田修、馬場佳一、山本尚穎、中島寛、後列左から、不明、菅村幸夫、中川滋夫、大賀二郎、永井新也。五色が原にて

入り、南沢をつめ、鳥帽子から葛温泉に下るルートに変更された。3泊ほどの短い縦走だったが、楽しい山旅であった。剣沢で碌なものを食べてないだけに、下界で美味しいものがすぐに食べられると心も軽くなつたこともある。最後の夜を、稜線上の五色が原の辺で迎え、山の良さをしみじみと味わうことができた。

3 1959年春山合宿

われわれが在部した頃の春山合宿は、専ら剣岳西面の尾根からの登攀に集中していた。1年生の1958年は早月尾根、2年生の1959年は赤谷尾根、そして3年生の1960年、再度早月尾根からバリエーションルートへとそのレベルもアップさせた。秋の荷揚げを含めると、富山から上市そして馬場島まで何度もよく通つたものだ。当時、剣岳西面の尾根は、まつたくの積雪期のルートで、辺りに小屋もなく夏道もない状況であった。わずかに馬場島に避難小屋がある程度であった。

この中で思い出に残るのが、やはり赤谷尾根から稜線にて剣岳本峰と毛勝三山をアタックした2年生の時の春山合宿だった。参加者15名中、ヤロー会は9名と存在感を發揮していた。剣の頂上へは中川が3年生の峯高

さんとアタックに出かけ、また毛勝三山へは中島と三股が往復し、ヤロー会メンバーは大いに活躍した。

もう一つ記憶に残るのが、1960年の春山合宿である。3年生になり自分たちの実力に自信ができ、チーフリーダー中川、サブリーダー中島で、自分たちで初めて責任を持ち、思う存分動き回つた合宿をもつことができた。ヤロー会が8名で、下級生に倉知たち6人が参加し、ある程度バランスがとれてきた。

早月尾根をつめ頂上にテントを出し、八つ峰上半、下半、VI峰Cフェース、源次郎尾根、本峰南壁、チンネ左稜線などのバリエーションルートに挑戦し、意気が大いに上がつたものだ。特筆すべきは、中川と小林（進）の2人のチンネ左稜線登攀であった。頂上のテントCⅢを朝5時に出て、登攀を無事に終えテントに戻つたのは、夜の9時を超えていた。

4 1960年冬山合宿

われわれの1年生のときの冬山合宿は極地法による槍から穂高をアタックだったが、1年生は連れて行ってもらはず、留守番。2年生の時が、南アルプスの三伏峠から北岳までの縦走、3年生の時が燕岳から大天井・蝶ヶ岳までの縦走、そして4年生の時が鹿島槍の集中登山であった。

この中でやはり記憶に残るのが1960年3年生の時に燕から蝶までの縦走だった。参加者14名中、ヤロー会は9名を数え一大勢力となっていた。4年生でリーダーだった渡邊嘉佑さんも、さぞやりにくかつたと思う。新雪の中のラッセルをしながらの燕山荘までの合戦尾根の急登のボッカは、流石に苦しかつた。また表銀座の稜線に出てからの黒部側から吹く強風も凄まじいものがあった。

燕のBCから大天井にC1をそして常念にC2を延ばし、われわれの行動は順調に進行した。この間、大天井から中川と中島の2人が、好天に恵まれ長駆15時間ほどかけ槍をアタックしたのが圧巻であった。ヤロー会の意気込みが大いに上がつたことは言うまでもない。

その時、私は小林(進)、大賀と一緒に、常念小屋前に張った最前線のC2に入つていった。槍へのアタックが終わつた翌日から、天候がくずれ猛吹雪と烈風になり、各テントとも丸4日間チンドンを余儀なくされた。本隊とすぐには合流するはずであつたわれわれ常念の3人組は、わずかな食料と燃料しか持参しておらず、日に日に乏しくなる食料を眺め、乾パンなどをかじりテントの除雪におわれる試練の毎日であった。5日目に本隊が来てくれたとき、渡邊さんが「お前らが食料を求め



前列左から、有賀盈、中川滋夫、中島寛、白井弘、石、倉知敬、
後列左から、朝木大統、三井博、宮本英治、不明、三股宏、
不明、大賀二郎、小林進二。剣岳の春山合宿で

て、稜線をさまようのではないかと心配してたゞ」といつていたが、まさにそのような状況に追い込まれていた。

翌日、やつと風は強かつたが天気が回復したので、全員で全ての荷物をボッカし常念を越え、蝶へ向かうことになった。テントは小屋の陰に張られていたので、稜線に出るまで風の強さがまったく予想できなかつたが、槍方面からの風は凄く、まともに歩ける状況ではなかつた。まさに全員這いつぶつて常念の頂上を目指したといつてよい。

気が付けば、ヤツケのフードはいつの間にか飛ばされ、毛糸の正チャン帽だけの耳はいつの間にか板のように硬化していた。不注意がおこした完全な凍傷である。常念の頂上を越えると風下となり、風の勢いもやつと弱まり人心地をつけるようになつた。蝶が岳の頂上近くでテントを張り合宿最後の夜を過ごすことになつたが、テント内で暖まつてくると耳が水ぶくれとなり異常に大きさになつてきだ。

凍傷が激しい山本と2人で、翌日、本隊に先駆けて早めに下山。帰京して医者へいったところ、耳を切り落とすぞと脅かされたのも今では懐かしい思い出となつている。

5 ヤロー会近況

10名いたヤロー会のメンバーも、いまや3人居ない。この10年ほどの間に、中島、小林(進)、大賀の3人を相次いで見送つた。それにヤロー会ではないが、われわれと苦楽をともにしてくれた1学年上の渡邊さんも、いまや逝つてしまつてゐる。寂しい限りである。ヤロー会として、途中まで山岳部で行動をともにしていた仲田が参加してくれ8名となり、現在少なくとも年2回は奥さん共々、一泊旅行に出かけたり忘年会をやつてゐる。相変わらず結束力は固く、毎回ほとんどのメン

バーが出席である。その中でわれわれの仲間の小林（正）夫人が数年前に亡くなり、メンバーからの脱落は亭主だけの話ではなくなつた。いよいよ皆、老境に入つたとしみじみ感じる今日このごろである。

集まるとやはり健康談義になることも多い。これから身体に気をつけ、青春を送つた仲間と少しでも長く、皆元気で頑張りたいものだ。

夏の終わりの加賀の白山

竹中 彰（昭39年卒）

夏休みやお盆休みの喧騒も落ち着く頃と期待して、加賀の白山に家内の光子と出かけた。平日に計画したことで幸い登山者は数えるくらいしかおらず、地元中学生の団体が騒いでいた以外は小屋も空いており、北海道以来続く悪天候も小康を得て2日間ほとんどガスの中での行動で、話題の雷鳥とのご対面は叶わなかつたが、結構花にも出会い楽しい山行だつた。

8月26日（水）曇りのち晴れ

週間天気予報から安定した天気が期待できる」と、復路の高速代は1000円の恩恵に与るべく水曜日に金沢泊、翌日マイカー規制を避けて別当出合経由で室堂に泊り、早朝の「来光を御前峰で仰いで下山、白山スーパー林道を通つて飛騨・平瀬温泉の「秘湯を守る会」の宿に泊る計画を立てた。

やや出発に手間取り、7:05に自宅を出発し

て八王子ICを8:10通過、松本ICを目指す。順調に10:30に松本の料金所（3500円）を通過して野麦街道（R158）を沢渡

経由安房トンネルを抜け、高山には12:30に着く。街中での駐車場探しも難儀なので、そのまま市外の道の駅「ななもり清見」に進み

高山ラーメンの昼食をとる。その後すぐ傍の中部縦貫道・高山西ICから東海北陸道・飛騨清見ICに入り北上して福光ICで出る（1400円）。東海北陸道は往復2車線のトンネルが連続し、特に五箇山からは12kmの長い飛騨トンネルがありウンザリする。福光からは医王山の北側を通つて金沢駅前のビジネスホテルにチェックイン（15:30）。夕食は翌日の入山に備えて控え目に駅前のイオングルの回転寿司屋で地物の魚を食して済ませる。

センジュガんピや次第に増えるハクサントリカブトなどを見ながら 12:20 に漸くトイ

8月27日（木）晴れ時々曇り

夏山シーズンもピークを越え、別当出合の駐車場までマイカーで入れる（月～金・20:00まで）ので、余裕を持って7:30にホテルを出発する。R157を鶴来からは手取川に沿つて南下し、手取川ダムからは狭いトンネルの多い道を白峰で勝山への道を分けて左に市ノ瀬に向い、終点の別当出合に着く（9:35、標高1260m）。駐車は100m程下つた一般車駐車場に下る手前、道路際の駐車帯（工事関係者用？）に1台分の空きスペースがあつたので、ズルしてそこを利用させて貰う。

入山届を出して 9:55 に吊り橋で別当谷を渡り、砂防新道に入る。平日で遅い時間の出発のせいか、前後の人影は全くなく、ブナ林の間を進む。2ピッチ目で中飯場（1520m）を通過し（10:46）、ハクサンシャジンらしき花を見かけ写真を撮る。この頃から下山していく家族パーティーなどと行き違う。2ピッチ目を1590mで刻んだ（11:07～15）後、別当峠（1750m）を11:33に通過。歩き出しでなかなかピッチが上がらないまま1855mで3ピッチ目の少憩（11:53～57）、きつい傾斜ではあるが比較的歩き易い道を辿る。

レ、水場のある甚之助避難小屋（1980m）に着き、オニギリとカップラーメンで昼食とする（～12:50）。ここまで来ると先行パーティーや下山して来たパーティーで少し賑やかになる。この頃一時雨がぱらついたが本降りにはならなかつた。食後の最初のピッチで南竜分岐（2100m）に着き（13:13～18）、南に展望のきく場所で一息入れる。

この後は黒ボコ岩を目指してしばらくトラバース気味に緩い斜面を進むが、2、3カ所水場があり周辺にはハクサンフウロなどの花も綺麗に咲いている。2230mでピッチを刻み（13:47～53）、水がチヨロチヨロ出ている「延命水」を過ぎてひと登りで弥陀ヶ原の末端、観光新道との合流点、黒ボコ岩を通過する（2320m、14:15）。ハイマツ、ササの間を平坦な木道が続くが、行く手はガスで目指す御前峰は全く姿を見せず期待はずであつた。五葉坂登り口（エコーライン分岐）で少憩（2365m、14:23～30）。ハイマツの中の大きな岩が重なつた五葉坂を乗りきつて15:00に室堂ビジャーセンター着、一人2食付き7700円を払つて受付を済ませる。

受付時に登下降ルートを確認されるが、明日の観光新道については尾根筋で悪天（雨、場合によって雷）が予想されるので避けた方が良いとのアドバイスがあつた。室堂は70

0人収容の大規模な小屋であり、部屋の割り当て（2段の下の奥、布団、毛布2枚と枕）を受けて場所を確保した後、明朝も悪天が予想されるのでそのまま御前峰に向うことにする。運が良ければ西が晴れて頂上でプロックணに遭遇出来るかもと期待したが…。

15:15にスタートして直ぐ上の白山ヒメ神社祈祷殿横を抜けて登つて行く。相変らず山

頂方面はガスで、青石、高天ヶ原を過ぎ、次第に風も強くなる中、家内は稍々遅れ気味ではあるが16:05に頂上の白山奥宮到着。周囲はガスの中で全く何も見えず、御前峰（2702m）の石柱をバックに写真撮影して下山する。頂上で年輩男性2人組、下山途中で同じく3人組と出会い。17:00からの夕食時間まで余裕があるのでイワギキョウ、ウスユキソウの頭花などの花を愛でつつ下る。道は大きな石を積んであるが、段差も適度で歩き易い。昔からの登拝道であり丁寧に作られている感じ。

途中で高校生3人組がトレーニングで登りのダッショウを繰り返していた。祈祷殿に戻り、来春中学受験の孫娘に受験祈願のお守りを求める。ビジャーセンターに16:40に戻り、夕食まで生ビール（500ml相当800円、350ml缶は500円、）で買ったものも空き容器は持ち帰りを求められる）を飲みながら待つ。食事は余り食欲の出る内容ではないが、味噌汁のお代り、フリカケ等で流し込む。食後しばらく受付周辺で天気情報、花情報などの掲示板を確認し、備付けの図書のページを繰る。トイレ（簡易水洗で使用済みペーパーは箱に分類）を済ませて19:00過ぎには寝床に横になり、廊下の中学生団体の声を聞くうちに眠りに落ちた。（歩数11.8千歩）

8月28日（金）曇り

早朝中学生の団体が起床して「来光を目指す音で目覚めるが、外は濃いガスで覆われているので、そのままユックリ寝ている。6時過ぎに学生が濡れそぼって戻り、寒い寒いを連発していた。7時から朝食を摂り、7:45に上下雨具を着けてビジャーセンターを出てガスの中を下山する。同室者は15分前に出発していたが、五葉坂下のエコーライン分岐で追いつき、相前後して木道の続くエコーラインを下る。

少し進んだ所で女性パーティーガがカメラを構えている先に羽毛状の花柱を伸ばしたチングルマの群生地があり、この後もかなりの頻度で道の両側に展開していた。その他カライトソウ、シモツケソウ、アザミ、ハクサンボウフウ、イブキトランオ、ミヤマトリカブトなどが目を楽しませ、急な下りも余り気にな

らない。室内は途中で膝と大腿筋に違和感を感じたところで、ペースが落ちしばしば立ち止まって待つ。9:00 に往路に休んだ南竜分岐を通過し、程なく甚之助避難小屋に着き(9:15～45)、お茶を沸かしてユックリ休む。この頃には雨の心配もなくなり雨具を脱ぐ。

その後左手の柳谷が開ける場所から眺めると眼下に大規模な砂防堰堤が広がり、急で崩れやすい谷との攻防を窺わせる。中飯場の水場で休んでいると(10:45～55)、夏休み最後の週末を控えて、子連れのパーティーが多くなってくるが、総じて子供の方が身軽に先行して来る。その後の下山途中で蔓性の植物の先に白い壺状の花が垂れ下がっているのを見たが、名前は分らなかつた。別当出合の吊り橋が見える所まで降りてきてホッとする。橋を渡り、鳥居をくぐれば終着の休憩舎に到着(11:40)。外のベンチ、テーブルで昼食とする。

駐車場に向うと、砂防工事も休みなのが来た時には満杯状態だったが数台しか止まつておらず、途中でそれ違つた多くの良い子は正規の駐車場に入れた様子。12:25 に駐車場を出て市ノ瀬経由白山スーパー林道に向う。手取川ダムを越えてトンネルを抜け、瀬戸、中宮、一里野(標高 550 m)と尾添川に沿つて進み、スーパー林道に入る。特別割引期間中で通常 3150 円が 2500 円になつてい

た。途中落差 86 m のふくべの大滝(900 m)、白山展望台、三方岩駐車場(1450 m)

を通つて白川郷展望台(1200 m)から飛騨側料金所(780 m)に降りていくが、ところどころへアピングカーブはあるものの往復 2 車線の完全舗装道路で、車は少なかつたが秋の観光シーズンには相当混雑が予想された。

飛騨側で R156 で平瀬温泉に予約した宿「藤助の湯ふじや」に入る(16:00)。源泉は 96 °C の含硫黄ナトリウム塩化物泉(弱アルカリ)で 15 km 引き湯し、井戸水で熱交換して適温に下げている。無色透明で稍々ヌルヌルした「子宝の湯」。久し振りに「秘湯の会」の温泉で、スタンプ帳も漸く 3 個となつたが前途遼遠。(16.5 千歩)

8月29日(土) 雨のち晴れ

夜間から朝までかなり雨が激しく降つていたが、温泉につかつてユックリする。やはり前日の下山のせいで筋肉痛が出ている。9:40 に宿を出発して、往路とは異なり東海北陸道を南下し、一宮で名神・東名を走ることとする。1000 円の恩恵に与る積りが横浜町田 IC で出た時には結果的に 1350 円であつた。途中厚木の辺りの事故渋滞に巻き込まれ、帰宅は 19:00 過ぎになつた。(総走行距離 1

042 km)

室内には昨年秋の大室山以来久し振りの山行だつたが、瞬発力のテニス等とは違う筋肉トレーニング不足は否めず、今後の山行に際しての課題と言える。

インドヒマラヤ放浪の旅

佐藤 久尚(昭41年卒)

一九八七～八九年、インドのニューデリーに駐在したことがある。その時、インドヒマラヤの山々を見るために行ってみたいと思つていた所がいくつかあつた。しかしながら、その時は時間が取れず行き損なつたが、退職して時間が取れるようになつたら、いつか行つてみようと思い続けてきた。そして昨年、退職し自由になつたので、計画を実行に移すこととした。

時期はモンスター明けの九月中旬から約一ヶ月。ルートは、まずデリーから飛行機でラダック地方の中心地、レーに飛び、そこからバスでヒマラヤを北から南に縦断してマナ

リーに出て、さらにバスを乗り継ぎヒマラヤ山麓を西から東に移動し、ガンジス河の源流に位置するガンゴトリ、ケダルナート、バド

リナートを回り、いつたんデリーに戻った後、最後にカンチエンジンガを見るために、列車とバスを利用して、ダージリンまで行くという計画をたてた。

こうすれば、インドヒマラヤの主要部を東西南北から眺めることができるし、名峰と言われるいくつかの山も間近に見られる。かつ、ガンジス河の源流にある三大ヒンズー教寺院も見学できるはず。ただし、レーからいつたんデリーに戻るまでは、ローカルバスを延々と乗り継ぐことになるが、どういうバス路線があるかは不明。ただ地図を見ると、道路はいい具合に繋がっているし、途中かなり大きな街もいくつかあるので、それらの間にはバスが走っているはず。幸い時間はたっぷりがあるので体調さえ崩さなければ何とか回れるだろう。放浪の旅も面白いかも、と気楽な気持ちで出かけることにした。

インドでは、駅で切符を買ったりトイレなどで荷物からちよと目を離している隙に、荷物を盗まれることがままある。また一ヵ月も滞在していると、一度や二度は必ず下痢やは振り返って特に印象に深く残っている部分のみを記してみたい。

ヤ山麓を放浪しようなどという物好きはいそうもないのに、最初から同行者を募るのは諦めた。

そんな訳で気楽な一人旅、年金生活に入つたのだから貧乏旅行も厭わずとばかりに、インターネットで四五日間オーブンの格安航空券とデリーの宿泊一泊分の予約を確保し、最小限の着替えと洗面道具、シュラフカバーとバカチヨンカメラ、地図だけをザックに詰め込んで、九月一六日成田を飛び立つ。家内や息子達からは「六七歳にもなつてバックパッカーの真似ごとをするなんて！」と、半ばあきれられての旅立ちであつたが、三三日間、途中二度の下痢とデリーの宿泊でノミかシラミか正体不明の害虫に身体中を数ヶ所食われて往生した以外はさしたるトラブルにも遭わず、雄大なインドヒマラヤの景観を堪能して、一〇月一八日、無事帰国することができた。

この間、約二六〇〇kmのバスの旅と、一四七一kmの鉄道の旅、四泊五日の氷河のトレッキング、興味深い職業や経歴を持った人々との出会いなど、面白くも得難い経験をした。全行程の記録を記すと長くなるので、ここでは振り返って特に印象に深く残っている部分のみを記してみたい。

自動車道路世界最高地点

九月二一日（快晴）

レー滞在三日目。レーからカラコルムに抜ける道の途中に、カルドン・ラという自動車道路としては世界一高い地点と称する峠がある。そこに行けばカラコルムの山がばつちり見えるはず。レーから車をとばせば二時間弱で行けるとのことなので、ジープをチャーターして行つてみることにした。

街中にある乗り合いジープのたまり場に行き、「一人のドライバーを捕まえて「カルドン・ラまでいくらで行くか」と聞いたところ、「許可書を持っているか」という。「許可がいるのか」と聞くと「いる」とのこと。峠を越えてヌプラ渓谷に入るにはインナーライン・パミットがいることは承知していたが、その手前の峠まで行くにも許可が必要とは思つてもいなかつた。こりやあダメかなと一瞬思ったが、インド駐在時代の経験から、インドでは何事もウラがあり、この種のことは最終的には何とかなるものだ、ということを思い出し、何か方法があるだろうとしつこく粘つていたところ、周りから数人ドライバーが集まってきた。そしてそのうちの一人が、「自分の車に乗れ」とばかりに、小生のバックの紐を引いて車の方に連れていこうとする。よく聞いて

みると、「チェックポストの役人の中に友達がいるから許可がなくとも大丈夫だ」と言う。料金交渉をすると往復一五〇〇ルピー（約三〇〇〇円）だとのこと、概ね想定していた料金の範囲内なので、追加料金は絶対払わないと念押しして、そのジープに決めて出発した。

レーの街から北に向かって真っすぐ登つて行くと、峠への登りにかかるところにチェックポストがあつた。ドライバーが小生のパスポートを持ってオフィスの中に入つて行つたが、一〇分もするとニコニコしながら戻つて



ガンゴトリ氷河の末端で。
背後に見える山はバギラテ峰（6856m）

峠には「KHARDUNG LA 5606MT 18380 FEET HIGHEST MOTORABLE ROAD IN THE WORLD」と書かれた標識が立つていて。また道路の反対側には電波中継塔と思われる鉄塔と倉庫のような小屋があり、その周りで数人の男が何か作業をしていて、とても五六〇〇mの峠とは思えない穏やかな雰囲気が広がつていた。しかし、そこからの眺めはまさに絶景であつた。北に目をやると、カラコルムの山々が一望のもとに見え、なかでもサセルカンリと思われる大きな真っ白な山がひと際高く輝いて見え、しばし我を忘れて見入る。

南に目を転じると、レーの谷を挟んだ向こう側に、ザンスカールの山々が雲海のように連なり、遠くヌン、クンと思われる二つの白い三角形のピークが、周りの山群から少し飛び出すような形で見える。一九〇八年に、大谷探検隊の橘瑞超と野村英三郎の二人が、中国側からカラコルムを越えこの峠に至り、さらにザンスカールを越えてスリナガールに出ているが、峠から累々と連なるカラコルムや

きた。「OKか？」と聞くとノープロブレムと言つて、無事チェックポストを通過。チェックポストからは登りがきつくなり、九十九折りの道が延々と続いていたが、軍用道路であるため比較的よく整備されており、思つていたよりも簡単に峠に着いた。

ザンスカールの山並みを見ていると、一〇〇年も前によくもそんな旅ができたものだと、信じられない感がするばかりであった。

ヒマラヤ縦断バスの旅

レーからザンスカール山脈の東端を縦断して、セントラル・ラホールの山を越えて、クル・バレーのマナリーに至る総延長四八〇kmの自動車道路がある。もともとは軍用道路として建設されたものであるが、今は一般に開放され、シーズン中は定期バスも走つていて、この道を車で走ればヒマラヤ山脈を縦断する形になり、雄大な景色が楽しめるはず。ただ、途中五〇〇〇mを超える峠を三つ、四〇〇〇mの峠を一つ越えなければならぬため、雪が降ればすぐに道路はクローズされるおそれがある。

レーに着いた初日に、インフォーメーション・センターに行つて、マナリーまでの定期バスがあるかどうか確かめたところ、「定期バスは七月から九月一五日までで今はもう無い。乗り合いのジープを捕まえたらどうか。幸いここ数日、雪が降つたという情報は無いので、客さえ集まれば行くだろうから、バススタンプに行つて聞いてみたらどうか」とのこと。バススタンプは街のはずれにあり、「そ

ここまで行くのは遠いなアーチ、一体そこで誰に

あつた。

「聞いたらしいのかなアーチ」などと考へながら街中を歩いていると、偶然、「マナリー方面車手配」と書かれた看板を掲げているトレッキング・エージェントの店を発見した。

その店に入りマナリーまで行きたいと言うと、「小型バスがほぼ毎日夜中の一時にバススタンドから出でてるので、今すぐ予約しろ」という。「小型バスの方がジープよりも料金も安いし、揺れも少ないので楽だ」という。定期バスの運賃から考へると少し高いなとは思つたが、足を確保するのが先決と思い、その場で一七〇〇ルピー（約三四〇〇円）払つてバスを予約した。

九月二二日（快晴）

午前一時、乗客定員一四人のところに一六人乗つて、バスはレーのバススタンドを出發した。窓の外は真つ暗闇で何も見えない。最初の一時間くらいの間は道路も比較的良く、バスはそれ程揺れずに走つていたが、それを過ぎると悪路になり猛烈に揺れる。座つても前の鉄棒に捉つていないと放り出されそうになる。この道路は基本的には軍用道路であるから、もう少し良く整備されているかと思つたがそうでもなく、以後マナリーまで道の状態は悪路と比較的良い所との繰り返しで

れ眺望は思つたほどは良くない。しかし少し

下ると視界が開け、息を飲むような景色が展開した。目の前にはC B山群の山々が手に取るような近さで広がり、さらにC B山群の後方にはホワイトセールとパープスラではないかと思われる二つの秀麗な雪のピークが望まれた（ホワイトセールでは、一九八一年に山岳部の後輩三名が遭難して帰らざる人となつているので、バスの中からピーカに向かつて秘かに手を合わせた）。

一時四五分、バーガ川とバライ・ナラとの合流点のダルチャヤに到着、ここで約一時間ランチ休憩。ここには数軒の茶店とチエックポストがあり、バスのドライバーが外国人乗客五人（小生のほかアイルランド人の中年トレッカー、タジキスタン人の若いカップル、国籍不明の若い白人女性）のバスポートを持つてオフィスに入つて行つて何か手続きをしていた。この後ロータンバスの登り口のコクサールにもチエックポストがあり、同じ手続きが行われた。

一六時一〇分、第四の峠ロータンバス（三九七八m）に到着。ここにはインド駐在時代に一度、マナリーからタクシーをとばして来て、セントラルラホール山群の眺望に感激したことがあるが、今回はバスは停まらず、あつぐらいの雪が積もつていた。

バララチャ・ラは広い雪原で、尾根に遮ら

を辿るのを楽しみにしていたが、残念であった。前回の記憶では峠からマナリーまではそれ程遠くないと思っていたが、意外と時間がかかった。峠からの下りの道が非常に悪くなっていること、途中各所で道路工事が行われていて何回も待たされたこと、二〇年前に比べて往来の車の数が格段に多くなり、すれ違いに時間がかかるようになつたことなどが原因である。

一八時五〇分、暗闇の中マナリーに到着、一八時間のバスの旅を終えた。マナリーは一大観光地に変身していた。

ガンゴトリ氷河のトレッキング

九月二七日（晴）

マナリーからシムラ、デラドンと三日間バスを乗り継ぎ、ウツタルカシに到着。ウツタルカシはこの地方の中心地で映画館まであるかなり大きな街であった。早速、宿の主人に紹介されたトレッキングエージェントについて、タボバンまでのトレッキングの手配を依頼すると、許可取得に二週間かかると告げられる。不覚にもタボバンまでのトレッキングに許可が必要などとは思つてもいなかつたので、またまたびっくり。

聞いてみると、「ガンゴトリまでは許可是

いらないが、そこから先は国立公園になつていて入園許可が必要」とのこと。「何とかならないか」と粘つてみるが、「どうしても許可取得には時間がかかる」とのことで埒があかず。あきらめて市内見物でもと思つて市内を散策していると、数軒のトレッキングエージェントが軒を連ねて一画に出た。念のためもう一軒当たつてみようと思つて、一番店構えの立派なトレッキングエージェントの店に入つて聞いてみると、「明日日出発でよければ許可が取れるし、トレッキングのアレンジ可能」とのこと。タボバン往復四泊五日、コック兼ガイド一人と四人のポーター、テント、寝袋、炊事道具、食料、ガンゴトリまでの往復ジープ代、一切を含めて二万七〇〇〇ルピーというところを二万五〇〇〇ルピー（五万円）に値切つて契約。

九月二九日（晴のち曇り）

一二時五分、トレッキングエージェントの店の前からジープに六人が乗り込んで出発、コック兼ガイドと四人のポーターはいずれもネパール人。コック兼ガイドはヴィヴェンクという名前で、奇しくもデリーの安宿と同じ名前。プロゴルファーの杉原輝夫にそつくりなので、会つた途端に親しみを感じた。

ジープに揺られること四時間あまりでガン

ゴトリに着く。ここはヒンズー教の三大寺院の一つであるガンゴトリ寺院を中心に開けた門前町で、谷間の狭い土地にかなりの数の土産物屋やレストラン、ホテルなどが密集している。ガンゴトリ寺院の対岸のロソジに宿をとり休んでいると、突然、トレッキングエージェントの社長と名のる恰幅のいいインド人が現れ、「これから許可の申請に行くからついて来い」と言う。訳の分からぬまま公園管理事務所に行くと、所長らしき人の部屋に通された。気難しそうな顔をした男が座つていて、対面すると、いきなり「ポーター四人は認められない。一人にしろ」と言う。予想外の展開に驚いたが、「テント、炊事道具、食料を運ぶのに絶対四人必要である」としか言いつらうがないので、それだけ言つて黙つていたところ、その男がプリツと席を立つて部屋から出て行つてしまつた。しばらく待つても彼が戻つて来ないので、しかたがなくトレッキングエージェントの社長だけを残して、ガイドと二人で宿に戻つた。

九月三〇日（快晴）

六時三〇分起床、朝食ができたとガイドが呼びに来たので、「許可は取れたのか」と聞くと、「社長が今朝もう一度交渉する」とのこと。不安を感じつゝもやることが無いので、



左がシブリング (6543m)、サイドモレーン越しに見える右の山がメルー (6660m)

にハヌマンティバ (五三六六m) の特徴のあるピークが眺められるようになった。さらに進んで行くと、ブリギュバルバ (六〇〇〇m)、マンダ (六五一m)、チルバサ・ピク (六〇四四m) と秀麗なピークが次々に姿を現し、それらに見とれているうちに今日の宿泊地、ボジユバサ (三七九二m) に着いた。

ボジユバサは扇状地の上にひらけた台地で、気象観測所のほか、ロッジ、茶店など数軒の建物が建っていた。敬虔なヒンズー教徒はここに泊まり、ガームーク (ガンゴトリ氷河の末端で、ガンジス河の最初の一滴が始まると信じられている聖なる場所) を往復するとの由である。ポーターがなかなか来ないので待つ間、茶店に入つてみたら、一人の中年の日本人がお茶を飲んでいた。話してみると、彼は筋金入りのバックパッカーで、若いころから世界中を回り、これまでにエチオピアやスダーンなどのかなり危ない所のほか、バルトロ氷河のコンコルディアまでも行つたことがあるとのことであった。

九時三〇分、コック兼ガイド、ポーター四人そろつて出発。バギラテ河右岸のよく整備された道をしばらく行くとチエックボストがあつたが問題なく全員通過できた。ガイドと雑談しながらゆっくり歩いて行くと、登るにしたがい谷間が少しずつ開けてきて、対岸

一〇月一日 (快晴)

六時三〇分起床、七時三〇分朝食、テントの撤収に時間のかかっているポーターをおいて、ガイドと二人で先に出発する。昨日と同じくバギラテ河右岸の道を行く。一〇時二十五

にハヌマンティバ (五三六六m) の特徴のあるピークが眺められるようになった。さらに進んで行くと、ブリギュバルバ (六〇〇〇m)、マンダ (六五一m)、チルバサ・ピク (六〇四四m) と秀麗なピークが次々に姿を現し、それらに見とれているうちに今日の宿泊地、ボジユバサ (三七九二m) に着いた。

ボジユバサは扇状地の上にひらけた台地で、気象観測所のほか、ロッジ、茶店など数軒の建物が建っていた。敬虔なヒンズー教徒はここに泊まり、ガームーク (ガンゴトリ氷河の末端で、ガンジス河の最初の一滴が始まると信じられている聖なる場所) を往復するとの由である。ポーターがなかなか来ないので待つ間、茶店に入つてみたら、一人の中年の日本人がお茶を飲んでいた。話してみると、彼は筋金入りのバックパッカーで、若いころから世界中を回り、これまでにエチオピアやスダーンなどのかなり危ない所のほか、バルトロ氷河のコンコルディアまでも行つたことがあるとのことであった。

分、ガームーク着。ここはガンゴトリ氷河の末端で、これまで何度も写真で見たことがある所である。巨大な氷河の下から激しく水が流れ出していく、ヒンズー教徒が、こここそ聖なる河ガンジスの源流と考えるのは、理解できる気がした。

そこからルートは右岸のモレーンに登り氷河の上に出る。クレバスを巧みに避けるように積まれたケルンを頼りに氷河を登つて行くと、やがて左岸のモレーンに突き当たり、それを越えると突然、平らな台地に出た。そこが最終目的地タポバン (四四六三m) であつた (一三時一五分着)。ここタポバンは、ガンゴトリ氷河とメルー氷河に挟まれた台地で、小川が流れその回りには一部草原も広がつていて、正に桃源郷と言つてもいいような長閑な處であった。目の前には怪峰シブリング (五四三m) がそびえ立ち、ガンゴトリ氷河の対岸にはバギラテ I 峰 (六八五六m) II 峰 (六五一m) III 峰 (六四五m) が屏風のように広がり、さらにメルー氷河のモレーン越しには真っ白なメルー (六六六〇m) が迫るよう見えて、しばらく時間の経つのも忘れて見入つてしまつた。

テント設営後、少しでもガンゴトリ氷河の奥を覗いてみたいと思って、一人でサイドモレーンの上についた踏み跡をたどつて一時間

ほど登つてみると、また違った展望が開けた。

左側からはチャタランギ氷河が合流し、その奥には名前の特定できない秀麗なピーグが望め、また、ガンゴトリ氷河の奥にはカルチャンド・クンド（六六三三m）ほか、いくつかの形のよいピーグが見えた。登るにつれ次々と新しい景色が展開するので、さらに奥に入つてみたい誘惑にかられたが、薄暗くなつてきたので、たまたまあつた大きな岩の上に登つて、再度辺りを見回してガンゴトリ氷河の旅の終わりとした。

この後、ケダルナート、バドリナート、ダジリンと回り、ケダルナート（六九六八m）、ニルカンタ（六五九六m）、チャウカンバ（七一三八m）カンチエンジュンガ（八五八六m）などの眺望を楽しんだが、最後に今回の旅の総費用を記して参考に供したい。

■総費用内訳■

航空運賃（成田⇒デリー、サーチャージ、空港使用料込）	84,540 円
航空運賃（デリー→レー）	12,000 円 (6,000Rs)
航空運賃（バグドグラ→デリー、）	12,300 円 (6,150Rs)
バス運賃	11,676 円 (5,838Rs)
鉄道運賃（デリー→ニュウジャルパイグリ）	2,890 円 (1,445Rs)
宿泊代（26泊）	35,150 円 (17,575Rs)
飲食代	26,334 円 (13,167Rs)
トレッキング代	50,000 円 (25,000Rs)
タクシーおよび雇上げジープ代	15,260 円 (7,630Rs)
諸雑費	18,080 円
合計	268,230 円

ヒマラヤ・トレッキング

— ホテル・エベレストビューと

ダウラギリ主峰・大氷河を望む旅

岡田 健志（昭42年卒）

会員の三森（昭40年卒）さんはネパールに住んだこともあり、ヒマラヤの絶景に詳しい。

6月の針葉樹会総会の席で、初心者コースでもあるこのトレッキングの概略説明があつたが、2009年秋、ポストモンスーンで乾期の安定した天気が期待できるこの時期を選び、ネパールヒマラヤへの旅に出ることとなつた。

参加者は、案内役でもある三森茂充夫妻、小島和人夫妻、岡田健志と会員外の中山夫妻、馬場夫妻（いずれも三森さんの友人）の9名で、同年代の中高年のチームとなつた。
趣向としては、ネパール東部のルクラからシャンボチエ丘に建つホテル・エベレストビューまでのエベレスト街道トレッキングおよび、中央部のカリガングダキ川沿いのコバン村のナウリコットの丘にあるロッジ・タサン

ビレッジに3泊して周辺を歩きまわる、といふもの。天候にも恵まれ、前半はエベレストを盟主とするクーンブ・ヒマールの山々、後半ではダウラギリ、アンナプルナⅠ峰、ニルギリ峰を連日眺めてヒマラヤの景色を堪能することができた。

10月25日

成田空港発～バンコク到着
ツイン・タワーホテル泊

10月26日

バンコク発～カトマンズ／トリブヴァン国際空港
サンセット・ビューホテル泊

10月27日

トリブヴァン空港～ルクラ空港(2840m)

～ガート(2492m)

エベレスト街道トレッキングのスタート。

この日はドードヨシ(川)めがけて下りとなる。「街道」というだけあって、行く欧米人・帰る東洋人、そのお供の人、ゾンキヨ(牛とヤクの交配種で、荷物を運ぶ家畜)と大変なにぎわいをみせて いる。特に10月から11月は一年のうちでもその数がピークになると か。私たちは「グンビラ・チーム」と自称す

る9名のグループで、これにサーダー(ダメー シュ)、シェルパ3名、荷物をかつぐボーター 数名とゾンキヨ5頭、コシク長1人とキシチンボーア2人と、ずいぶん多人数の一団となつた。サンライズ・ロッジ泊

10月28日

ガート(7:50)～パグディン(9:00)～ト クトク(10:05)～昼食(10:35～12:00)～リ バー・サイムロッジ(13:15)～チュモア(14:00)～モンジヨ(21835m)ナマステ・ロッジ泊

トクトクでランチをとったが、そのちよつ

と先のポイントからタムセルクが見えた。あくまでも青い空をバックに、ヒマラヤ壁をもつてそびえる山容を見て、「来たなア」と感動する。

10月29日

モンジヨ(7:50)～ジョサレ(吊り橋8:10)

～(吊り橋8:30)～(最後の吊り橋9:40)～

エベレスト見えぬ(10:30)～エベレスト展望台(11:00)～ナムチヨ村入口(12:25)～ソナム・ロッジ(3440m 12:55)～ソナム・ロッジ泊

初めてエベレストをこの目で見た。感激である。高度順化に効果があるかと思い、荷物

をロッジに置いてカメラだけもつてチヨルクンの丘にあるビューポイントまで登る。エベレスト、ローチエ、アマダブラム、タムセルクなどが目の前に立ち並び、その絶景に声も出ない。10月も末だというのに、しかも3000mを超す高度なのに昼間は寒さを感じない。少ないが花も咲いている。

10月30日

ナムチヨ(7:50)～チョルクンのビューポイント(8:15～9:05)～パンラマホテル(10:50)～ホテル・エベレスト・ビュー(11:25)～ホテル・エベレスト・ビュー・ホテル泊

エベレスト・ビュー・ホテルのテラスや屋上展望台からの展望はすばらしい。中島寛さんの碑に参る。エベレストをはじめとする山々が一望できる、日当たりの良い場所にあつた。

10月31日

クムジュン、クンデ村を散策。とはいって、散策に出たのは、元気のある人のみ。ここまで、高山病の予防のため、ゆつたりした日程を組んでもらつたにもかかわらず、小生は朝から下痢と嘔吐に悩まされ、ホテルで一日休養。

前日は20時ころ就寝したが、24時ころ呼吸が苦しく感じ、フロントへ電話して酸素を

届けてもらつた。それでも寝ることができず、朝を迎えた次第。食欲なく、お茶を飲んでもすぐ下す。下痢止め薬は効かなかつた。ホテル・エベレストビューポ



エベレスト遠望

ムズ・ガーデン・リゾート泊
今日でエベレストともお別れ。名残り惜しいが、シャンボチエのヘリポートまで下り、近くの斜面を登りエベレストにお別れ。先発の小島さんたちは、ルクラまでヘリで降りて、定期便（軽飛行機）に乗り換えてカトマンズまで。後発の私たちは、ル克拉からのこのへりに乗り、苦労して登ったエベレスト街道を一気に下りる。ただし、自力でル克拉へ下りる体力はなかつたが。ル克拉でヘリに給油し、そのままカトマンズへ。

11月1日
ホテル (8:15) → シャンボチエのヘリポート (8:45～9:40) → ルクラ (給油 9:50～10:00) → カトマンズ (10:45) サンセットビューホテルに預けた荷物を整理したあと、トリップヴァン空港 (15:10) → ポカラ (15:30) マ

ムズ・ガーデン・リゾート泊
天井に頭をぶつけ、砂ぼこりをトレッカーにまきちらしながら行く。
タサンビレッジは、東にカリガンダキ川をはさんでニルギリ峰が、背面（西）にダウラギリを見る高台にあり、こんな辺境にこんな立派なロッジが、と驚嘆する。オーナーは、若いころに大阪で修業したこともあるといふ、アルジュン・トラチャン Arjun Singh Tulachan さんで日本語もペラペラ。近隣のハイキングのガイドをしてくれた。この日は、ナウリコット村を散策。村は、外見では寒村と呼んだらピッタリのたたずまい。ほとんど自給自足の生活をしているらしいが、そば粉はポカラやカトマンズにむけて商業生産したとのこと（カトマンズのサンセットビューホテルで食べたお蕎麦はここで生産されたとのこと）。赤い蕎麦の花は有名。

11月2日
ポカラ (7:00) → ジョムヘン (7:20～8:00) → マルファ (9:45) → シクチエ (10:30) → コバーン (11:00) → ロッジ・タサンビレッジ (11:15) ロッジ・タサンビレッジ泊
ネパールの中央からやや西より、ジョムソンまではポカラから20分のフライト。小型の飛行機はカリ・ガンダキ川をさかのぼり、左前方にダウラギリの雪の頂を見ながらジョムソン (2720 m) 空港へ。そこは、緑のない、砂山にかこまれた土地だった。

ジョムソンからコバンまでは、時にはカリ・ガンダキの河原を行くものすごいガタガタ道。多くのトレッカーは徒步で行くが、クンビラチームはジープに9人乗り合わせ、車の

11月3日

タサンビレッジ (9:35) → カルキユ (11:45) → セロン湖 (12:30～13:25) → タサンビレッジ タサンビレッジ泊

トランチャンさんに案内してもらつて、お弁当を持つてのハイキング。ダウラギリのアイスフォールが近くに見えるあたりまで、林のなかを歩く。途中、ニルギルの北の外れのそまたに向こうにアンナプルナⅠ峰が見えた。



中島寛さんの慰靈碑にて
左から、三森、小島、岡田（手前）

ボカラ空港での乗り継ぎ時間が長かったので、タクシーでフルバリ・リゾートホテルに行き朝食をとった。気温が高く一気に汗をかく。カトマンズに戻り、夜はサンセツト・ビューホリコンサート。

11月6日

日本大使館公邸へ水野大使表敬訪問のあと、カトマンズ市内の観光し（スワヤンブナート寺院、旧王宮ハヌマンドカ、ダルバール広場）、買い物なども楽しむ。ドウワリカ・ホテル泊

11月7日
タサンビンシジ（9:35）～吊り橋（10:35）
～コケタンチ村（10:55）～チチ部落（12:10）
～チチ湖（12:20～12:55）～タサンビンシジ泊
（15:05）タサンビンシジ泊

ダウラギリの氷河、アンナプルナI峰、二
ルギリ峰の眺望を堪能した。

錦秋の藏王連峰縦走（北藏王・南藏王）

中村 雅明（昭43年卒）

蔵王で思い浮かべるのは、日メラルドグリーンの御釜と樹氷とスキーで、山登りよりもコースは有人の山小屋なし、水場なしで、寝袋・食料・水を背負って避難小屋2泊の高齢夫婦にはかなり厳しいものでしたが、幸い天気に恵まれ、紅葉を愛でながらの静かな山旅を楽しみました。

11月5日

タサンビンシジ（5:00）～ジヨムソノ（7:20）
～ボカラ（7:50～12:05）～カトマンズ
(12:35) キャラムリホーホテル泊

10月12日 東京（6:12）～山形（9:02～9:29）
～笛谷峠（10:10～10:30）～雁戸山（13:35～

13:48）～南雁戸（14:52～15:04）～八方平避難小屋（15:30）
10月13日 八方平避難小屋（7:00）～名号峰（9:01～9:12）～追分（9:48～10:00）～熊野岳避難小屋（11:05～11:30）～熊野岳（11:40～11:55）～刈田岳（12:44）～刈田岳避難小屋（13:16）

10月14日 刈田岳避難小屋（5:39）～杉ガ峰（6:21～6:24）～芝草平（6:40）～屏風岳（7:31～7:38）～南屏風岳（8:10～8:20）～不均岳（8:58～9:10）～南藏王登山口（11:14～11:34）～吉沼バス停（11:52）

10月12日 東京～山形新幹線の山形行始発のつばめ101号で東京を出発、山形着。駅で6㍑の水を補給

し、タクシーで笹谷峠に向かいました。この方面はバスの便が悪く、祝日はバスが運休なのでタクシーを利用するしかありません。途中で車が不調となり、運転手さんが誤つてメーターを倒したため、正確な料金がわからず、推定で6000円（チップ込み）払いました。

3連休の最終日のためか、峠の駐車場には自家用車が沢山停まっています。ここに車を置いて、神室岳、雁戸岳を登る人が多いのを知りました。荷物を整理して、いよいよ北蔵王連峰の縦走を開始。2日分の食料、水(6ℓ)、寝袋等の重さがかなりこたえます。2P目で室内が濡れた石で滑り前向きに転倒し、胸、膝、手を痛めヒヤリとしました。幸い歩行を続けることが出来ました。緩やかな登り2時間ほどで閑沢からの道と合流します。途中で下山してくる登山者と多数出会いました。

雁戸山への登りは急になり、蟻の戸渡りと呼ぶ細い岩尾根を息を切らして登りました。風も強くなりザックの上部に入れた4ℓの水がゆれてバランスを崩しそうになりました。雁戸山(1484・6m)に13時45分到着。3人の登山者が休んでいました。360度の展望、周囲の山肌の紅葉が見事でした。雁戸山をかなり下り、ほぼ同じ高さを登り

返し、南雁戸山(1486m)に到着。二人だけの頂上を楽しんだ後、下りにかかりました。南雁戸山から少し下った所で、八方平小屋が見えました。紅葉の台地に小屋が見え、絵本の中の小屋の様で心が和みました。15時30分、八方平小屋に到着。二階建ての大きな小屋で、内部も綺麗です。夕食の時、小屋のドアを開けると夕日が小屋一杯に差し込んで綺麗でした。5時半には夕食を終え、暗くなつてきましたので早々に就寝しました。同宿者はなく一人だけの夜です。風が強くドアがガタガタと鳴つて室内は怖くてなかなか寝付かれなかつたとのことです。流石に秋山、寒さがこたえて持ってきた衣類を全部着込んでしまいました。

10月13日(火) 晴れ

本日は楽な行程なので7時に出発。小屋から稜線を鞍部まで下り、名号峰までは樹林帶の中の緩やかな登りです。眺望が利かない登りですが、ミズナラ、ブナの紅葉がきれいで足が進みます。名号峰が近づくにつれてナナカマドの赤い実が青空に映えます。ところが、道の真ん中にクマの糞と思われるものを続けて発見。クマ除けの鈴を持って来るべきと反省しきり(忘れ物その1)。

名号峰に9時01分に到着。明るい花崗岩の

広場で大休止。昨日から歩いてきた雁戸山からの稜線、これから向かう熊野岳を望める絶好の休憩スポットでした。名号峰からは道が良くなりました。背の低いアオモリトドマツの灌木、岩まじりの道をゆるやかに登ります。熊野岳にかかる頃から雲が空一面に広がりました。軽装のハイカーが二人休んでいました。石室ですが中は意外に明るく居住性は良さそうです。

少し食べた後、熊野岳頂上(1840・5m)へ向かいました。風が強く歩くのが少し困難でした。頂上の熊野神社にお参りし、写真撮影の後、御釜に向かいました。37年ぶりの御釜でしたが、どこで御釜を見下ろしたか記憶にありません。自分の足で縦走してきて見る御釜は格別です。御釜展望台には観光客が一杯です。レストハウスでトイレを借り、名物のコンニャク玉を食べてしばし観光気分にひたりました。室内は明日は雨と悲観し、帰りたいと漏らしました。それを冷たく聞き流して出発。

刈田岳(1758m)はザックを背負つたまま写真を撮り、そのまま刈田峠に向かいました。40分ほどで刈田峠避難小屋に着きました。

早々と就寝しました。雨がバラバラと屋根をたたき始め、明日は雨中の縦走を覚悟しました。ところが、一眠りした8時30分頃、窓から星が沢山見えました。外に出て空を見上げると満天の星です。思いがけない天気好転を喜びました。夜半に寒さがつのりましたが、小屋に備え付けの毛布をかけてしのぎました。

（13時16分）。小屋は思った以上にキレイで驚きました。トイレが中にあるのが助かります。荷物の整理が済むと夕食までにやることはありません。文庫本を持ってきましたが読む気にならず、ラジオも持つてくればと悔やみました。ラジオがあれば明日の天気模様が判るので避難小屋泊まりの時はラジオ必携です（忘れ物その2）。

小屋に入る頃からガスが流れできました。風もかなりのもので気温も低くなりました。シュラフに入つて暖を取りました。夕方まで同宿者は現れず、今日も二人だけの夜になりました。夕食を早く済ませ、暗くなつた頃



10月12日 南雁戸山頂上 山乃神の碑

10月14日（水）曇り（ガス）後晴れ
長い夜を過ごし、4時起床。外を見るとガスっていますが雨の心配はなさそうです。ロウソクの灯りで手元を照らしつつ、即席ランの簡単な朝食を済まし、5時半過ぎに出発しました。雨の心配は無いものの、風やや強くガスが流れてくるので雨具上下、スペツの完全雨仕度です。杉ガ峰まで登りが続きましたが、水、食料がほとんど無くなり荷物がぐーんと軽くなり、難なく杉ガ峰（1745・3m）に着きました。

不忘山と言えば、今年の3月、妙高山で遭難死された近藤泰さんの追悼写真展（一橋山岳会HP）に不忘山の中腹で倉知さん、前神さんと一緒に撮った写真があります。それを思い出出し彼を偲びました。頂上でガスが晴れるのを待ちましたが、晴れそうにないので下り始めました。頂上から少し下の「不忘の碑」で写真を撮つた後は、どんどん下りました。ガスはすっかり晴れ、空一杯に広がつた青空の下、眼前に広がる山肌の紅葉を見ながら気持ち良くなつた。途中で単独行の男性に出会いましたが、今日会つたのはこの1人だけでした。

早々と就寝しました。雨がバラバラと屋根をたたき始め、明日は雨中の縦走を覚悟しました。ところが、一眠りした8時30分頃、窓から星が沢山見えました。外に出て空を見上げると満天の星です。思いがけない天気好転を喜びました。夜半に寒さがつのりましたが、小屋に備え付けの毛布をかけてしのぎました。

南屏風岳まではハイマツやアズマシヤクナゲに覆われた緩やかな稜線歩きで快適でした。シヤクナゲが咲く季節は、楽しい稜線漫歩となることでしょう。南屏風岳からの下りから不忘山まではヤセ尾根で、ロープを張ったガレ場に注意しながら歩きました。不忘山の登りも大したこともなく、予定よりは早く最後のピーク不忘山（1705・3m）に着きました。

不忘山と言えば、今年の3月、妙高山で遭難死された近藤泰さんの追悼写真展（一橋山岳会HP）に不忘山の中腹で倉知さん、前神さんと一緒に撮つた写真があります。それを思い出出し彼を偲びました。頂上でガスが晴れるのを待ちましたが、晴れそうにないので下り始めました。頂上から少し下の「不忘の碑」で写真を撮つた後は、どんどん下りました。ガスはすっかり晴れ、空一杯に広がつた青空の下、眼前に広がる山肌の紅葉を見ながら気持ち良くなつた。途中で単独行の男性に出会いましたが、今日会つたのはこの1人だけでした。

ほぼコースタイムで南蔵王登山口に到着（11時14分）。小休止の後、吉沼バス停まで歩き、2日半の蔵王連峰縦走を終えました。

バスを乗り継いで白石蔵王に出て、夕刻帰京しました。家内にとつては荷物も重く、避難小屋の夜の怖さ・寒さが堪えたきつい山行だつた様ですが、自分にとつては水場のない稜線を避難小屋に2泊して縦走が出来たこと、登山対象としての蔵王連峰の良さを味わえたことで大満足でした（同行・完歩してくれた家内に感謝）。

りで登ることが中心である。メンバーの中でも、40歳になろうとする私が、会の一一番の若手！ だつたくらいである。

「山登りから、完全に離れるよりもよかろう」と思い入会したのだが、私が一番若いということもあり、かわいがられたし？、地元の人たちとも知り合いができ、そして何よりも、自然を愛でながらの低山歩きの楽しみを発見できたのはよかったです。針葉樹会員の方々も、転勤等で地方に居住するときは、その地元の山岳会に入会するのはいかがであろうか。

以下では、私がこの2年間で登った九州の山々について簡単に書き、九州の山に登ろうと考えている針葉樹会員の方々の参考に供したい。なお、以下の山々は山岳会で登った山だけでなく、単独や普通の知り合いと一緒に登った山も含まれる。また、発表する前提ではなかつたので、コースタイム、メンバー等の正確な記録は取っていない。あくまで、感想、印象と受け取っていただきたい。なお、私の登山備忘録的な意味も含んでいるため、針葉樹会員の方々は、あまり登りそうもない山も含まれていることをご容赦願いたい。

また、最後に、佐賀県、長崎県のクライミング事情についても、少し書いた。

はじめに

私は、平成20年4月から、佐賀県伊万里市に居住し、地元の山岳会に入り、主に九州の低山を登ることが多かつた。「山岳会」といつても、メンバーは中高年がほとんどで、先鋭的な登攀や冬山をやるのでなく、低山を日帰

開聞岳（鹿児島県）

富士山状の、遠目からみると綺麗な山。山腹をらせん状に頂上まで登る。技術的には全く難しくない。海に突き出したように位置しているので、登っている最中の海の眺め、頂上から眺めは素晴らしい。眺めの素晴らしさを堪能するため、天気の悪いときに無理に登るのはよくないだろう。

なお、開聞岳は登山そのものよりも、下山してからの宿の砂風呂、鹿児島の黒豚、焼酎の方の楽しみが大きいだろう。

韓国岳（宮崎県、鹿児島県）
登山道はよく整備されている。頂上往復だけなら全く問題ない。ただし、火山状のため、大きく噴火口跡などが開いており、近寄って落ちたりしないよう注意が必要。現に、落ちて行方不明になる人がいるときく。ここも、下山後の、霧島の温泉が楽しみ。

由布岳（大分県）

形のよい独立峰。元気な人であればコースタイムの半分くらいを目指して上り下りするなど、トレーニング山行に適した山だろう。

平治岳（九重連山、大分県）
6月初旬に登ると、ミヤマキリシマの群落

が色鮮やかで美しい山。もつとも、それを目当てにする人たちが多いので、この時期のこの山域は非常に混む。山頂でもゆつくりできないくらいなので、注意が必要。

阿蘇高岳（熊本県）

ここもミヤマキリシマの群落が美しいところで、目を奪われた。

赤石山、石鎚山（四国）

九州の山ではなく、四国の山であるが……。石鎚山は観光地化されていて、容易に登れる。赤石山はそれなりに登山らしかった。稜線づたいに歩くとなかなか岩が多く、アルペン的な雰囲気である。もつとも、岩登りの技術を必要とするまでのコースではない。

佐賀県内の山々

佐賀県内には、日帰り低山ハイクやランニング登山に適した山がたくさんある。登山口まで、車でのアプローチが容易である。

地元伊万里市にある腰岳には、朝の出勤前に登ったことがある。遊びに来ていただいた竹中彰先輩と早朝に登つたこともある。ここは黒曜石がとれる場所として有名で、とれた黒曜石は遠く朝鮮半島に渡っている。私も金山の博物館で確認したことがある。九州が朝



こんな格好で歩いていました。(左端が田形)

ナ一がいいのか（登山者が少ないから？）、登山者が捨てたようなゴミは少ないが、不法投棄の粗大ゴミが結構あり、驚いたことを覚えている。

なお、佐賀県の最高峰に間違われる山で、天山という山がある。同名の焼酎もあることから知名度がある山である。頂上直下まで自動車で上がるが、登山道もある。佐賀平野、有明海、福岡市街の眺めが素晴らしい。

佐賀県の最高峰は、長崎県との境にある経ヶ岳という山である。佐賀県民には、この佐賀県で一番高い山を知っている人も、登つたことがある人も少ないので、私が事務所の人たちと一緒に登つたが、誰も経ヶ岳のことを事前に知らなかつたし、登つたこともなかつたのである。頂上からは大村湾、雲仙方面まで見渡せる。

佐賀県、長崎県のクライミング事情

佐賀県では、多久高校にクライミングウォールがあり、無料で登させてくれる。また、長崎県では佐世保市の公共スポーツセンター内にクライミングウォールがあり、これも無料で登らせてくれる。私は、週1回くらいのペースで、この佐世保市のクライミングウォールに登りに行つてている。どこのクライミングウォールでも、1日2000円くらい

を徴収されるのが普通であるから、西九州のフリークライマーは大変恵まれている。なお、長崎県総合体育館にもクライミングウォールがあり、こちらも無料で開放されているとのこと。フリークライミングを楽しみたければ、長崎県に行け、と言えるであろうか。

また、長崎県には大村市の野岳という場所に自然の岩場があり、こちらも人が少ないが、よい岩場であり、魅力的である。

最後に……

九州は、先鋭的な登山はあまりできないし、冬山は楽しめない。しかし、すぐそこに自然があり、ハイキング、ランニング登山に適したフィールドは無限にある。また、上記のように佐賀県、長崎県のクライミング事情は非常に恵まれている。

私も、できるだけこうした恩恵を享受しようとしていたが、それでも不十分なところがあつた。屋久島には行けずじまいであつた。また、九州に来ることがあれば、もう一度、このような状況を楽しむようになりたいと考えている。

奥三河／厚血川ゴルジュ溯行

山田 秀明（平15年卒）

2009年6月21日、浜松に朝5時半に鳥

本真司（平17）と集合。通例の映画DVDは私が選択した「ラブ×バン○ン」というブラスバンド映画だ。これが、うくん、なんとも残念な部類な映画だった。少なくとも気合が入るではない……。失敗した……。

さて、佐久間の集落を越えて、龍王淵駐車地に到着後、着替えて遊歩道を降りる。

10分かからずには渾へ。渾沿いの道を1分で龍王権現の淵を従えるF₁。しめ縄をくぐつて、様子を窺う。つえ？ Nさんコレ登つたの？？ うくん、キビしそうなんですけど……。いや、Nさんはいいさ。よく、初心者を連れて突っ込んだなあ。少なくともフォローにもそれなりにクライミングの知識を求めらるところなんですけど……。

今回我々のパーティもNさんと同じように経験者+初心者という感じで、まあNさんたちも行けたのでいけるだろうと思つてきた

わけだが、違うところはリーダーの私がそれほどの自信家じやない点。鳥本……、いやあフォローは無理そだなあ。というわけで、これは「巻き」ということで。実のところ、わたしが登れる自信もそもそもないわけなのだが、それは責任転嫁ということだ。

左岸を巻く。巻きはそんなに良くはないが、木が生えており、そんなに悪くもない感じ。ノーザイルで滝上へ。

続いて、ゴルジュになつて1m幅の水路となる。渾は右へ曲がつて5mのナメ滝（F₂）となつている。ウェットスーツ、ライジャケを着こんで、まずは1m幅の水路へ。まあ足はつく感じでそれほどではない。しかし、このF₂が曲者だ。水流右は確かにそれほど傾斜は強くはないが、ほんとうにツルツル。爆流を泳いで左壁を登るという手もある（Nさんはそう突破したようだが……）が、左壁は傾斜も強いし、この爆流を渡るんですか……。しかし、巻くに巻けない。まあ、右壁は途中まではリスがありそう。途中からはツルツルだが、私はクライミングシユーズだし、なんとかなるかも。まあ落ちてもドボンだしなあく。というわけで、見通しが立たないけれど、取付くことにした。

リスにナイフブレードを2つぶち込み、アブミに立つ。そこまでは予定通り。しかし、

そこから……。いや、突っ込むにしてももう一步高いところまでいきたい……。極小リスはあるので、試しにナイフブレードを刺してみるが、やつぱダメ……。ううん、どうしようかなあ。戻ろうかなあ……。おつ、そういうえばラープもつてきてたなあ、試しに打ってみるか……ツオツ^(o)！なんか決まった感じがするんですけど。そして、恐る恐るアブミをかけて乗り込んでみる……。ツオツ^(o)！いいねえ、ラープいいねえ。最高 Max ! ん、でもそのあと……。極小リスすら何もないじやん!!! どうする？ どうする？ フリーでやるしかねえか……。右手の細かい力チを拾い、滑りそうなスタンスに立ちこみ、左手のカチを広い、右手のペーミングで騙しながら、左上にトラバースする感じで……。ツルツ、あつ。ドボンッ。落ちちまつたぜ。いやあ、あと一手だったのだけれどなあ。でも、ラープはこの衝撃にも耐えて生き残っている！ ラープすげえつ！ とにかく、まああと一手でなんとなくいけそうな気もしたので、再度トライ。今度は足の置き場も完璧。悪い立ちこみを騙しながらも、なんとか落ち口までトラバースできた。もちろん、その後、室伏張りに雄たけびを上げたのは言うまでもない。久しぶりの会心のクライムだった。

さて、フォロー。ユマールを渡したので、何とかユマーリングで上がつてこれると思つたのだが……。コイツ、完全に忘れていやがる……。つえ、教わつてないつて？ うーん、そうだつたかなあ。そういうえば、教えていなかつたかもしれないなあ。はい、いい加減な先輩・後輩ですつ。というわけで、即席で教えることに。しかし、そもそもがいい支点がない、私の肩がらみが支点になつていて距離は離れているし、沢音だつてうるさい。なかなか伝わらない。しまいには怒鳴りながらとなるので、その光景はさながら即席講習といふよりは、ただの叱咤激励に過ぎないのだつた。結局、この5mをユマーリングするのになんと20分！ もかかつてしまつた。もちろん、鳥本は疲労困憊である。しかし、ランナーはまったく回収してくれなかつたので、私が再度、鳥本を支点に懸垂、回収に向かう羽目に。いやあ、疲れた。

ゴルジュはまだ続いている。大きな釜を持つた4m滝だ。しかし、これは大きな釜を持っているとはいえ、釜が埋まつたのだろう、足がつくので、それほど難しくはなく水流左を快適に越えられる（念のためロープ使用）。この滝を越えると龍王淵ゴルジュは終了し、のほほんとした。沢になるのでひとまず休憩。

なんでもない川原は、とうとう民家の隣を流れ出し、そんなところをヘルメットと怪しい格好の二人組が通り過ぎる。堰堤2つを右から巻き（左から巻いたほうがよかつたかも）、なおもフツーの川原を進むと、ドドンド20m滝が現れる。

ても、続行できそうな感じじゃないので、降りることにし、念のため、懸垂下降をして沢床に降りた。

鳥本は、結構まだ痛がっている。でも、歩けないことはないようだ。荷物だけ全部担ぎ、歩いてもらう。幸いにもさつきの堰堤まで歩いて10分弱程度で、そこまでは滝などの障害は何もない。ということは下界も近い。ゆっくり歩き、堰堤上。そこから車道までも確かに近く5分程度。駐車地もそこから10分ちょっとだった。まだ昼前で、田舎にありがちの12時ちょうどのサインレンが鳴り響く。

さて、帰りは「うた魂！」という映画DVD。「合唱、なめてんじやねえぞ」という文句の青春映画。ありがちの展開だが、見所は「15の夜」合唱と「I am FULLTEEN」の絶叫シーン。これがとつてもいいんだなっ！特に「15の夜」はアツいぜっ！このシーンだけ5回はリピートです。「♪だあれもしばられたくない♪おおおおおお♪」……。ああ、行く時コレを聞けばよかつた。DVDをかける順番を間違えたのも敗因のようだ。

後日の連絡によると……。鳥本はどうやら肋骨を一本やられていたらしく。帰り、東海地区でそれなりに勢力を張っている炭火焼チエーン「さわやか」（ネーミング）に関して突つ込みどころ満載です）で大盛りハンバー

グを一人してモリモリ食べたのだが……。思つたより重傷だつたが、それでもそれだけで済んでよかつたなあ。めでたし、めでたし。



■新入部員を迎える新緑の宴を開く

トピック

4月17日（土）、国立の部室で花見の宴に代えて新緑の宴を行いました。

参加者＝上原、竹中、佐藤（力）、中村（雅）、西牟田、井草、前神、佐藤（活）、川名、コースチャ准备や買い物は佐藤（力）さん、中村さん、川名さんや学生が行ってくれ、すつきりした部屋で16時頃からスタートしました。学生は、望月君が山岳部長で、彼の山の繋がりで5名、茶道部関係で3名の、近年では最多の8名が集まりました。各人はそれぞれ現在、ワンドーフォーゲルや山友会などに所属していますが、それなりの経験もあり、望月部長の下に楽しい山登りをしてくれることを祈るばかりです。

学生＝部長・望月優（山友会・商3）、山根範子（茶道部・経2）、伊藤研祐（茶道部・社3）、米田卓矢（茶道部・法3）、湯田啓斗（ワングル・商2）、棚橋友洋（山友会・如意団・商2）、松林佳隆（山友会・如意団・商3）、菅原由衣（津田塾大学国際関係1）

（前神直樹 記）

■竹中彰さんが日本山岳会東京多摩支部の初代支部長に選出されました。

2月20日に立川市のホテルで日本山岳会東京多摩支部の設立総会が開催され、初代支部長に竹中彰さん（昭39卒・針葉樹会会長）が選出されました。同支部は、全国で29番目の支部で、会員約200名です。

■針葉樹会懇親山行が大磯・高麗山で行われました。

日時：2010年2月10日 9時30分 大磯駅集合

参加者：佐薙、高崎（治）、丸山、仲田、三井、高橋、蛭川、竹中、三森、岡田、中村（雅）

昨年11月の計画が悪天候で中止となつたため、あらためて相模川廻上の途中で遭難された山崎さん追悼の意味を込めて大磯の高麗山で懇親山行が行われた（山崎さんは数年前、平塚に移られてからしばしば高麗山でウォーキングや樹木観察を楽しんでいた）。

曇天の中、11名が大磯駅に集合し、山行幹事の佐薙さんから大磯観光協会のガイドマップを手渡される。途中、大磯八景の一つで化粧坂の松並木や

井戸を通り、高来神社（元、高麗寺）に参拝してその裏から高麗山を目指す。緩い女坂を辿つて最後に

石段を登り、11時25分に頂上（167m）に着く。

小憩の後、カシ、スダジイ、タブノキなどの常緑広葉樹が育った遊歩道の尾根道を歩き、八俣平を経由し浅間山に向かう。ときどき散歩する地元の人ともすれ違い、20分ほどで一等三角点のある頂上（181m）に到着。有志が担ぎ上げた水とバーナーで幹事が準備したステープ、コーヒを作り、昼食とする。

食後は大きなテレビ塔のある湘南平に向かい、寒桜？が咲く千畳敷広場の反対側にある展望台に登つて360度の眺望を楽しもうとしたが、あいにくの天候で視界はきかず、風も強いため早々に引き上げる。反対側から上がつてくる車道の終点の広場の端の大きな石碑の解説をみると、日本山岳会の先達、岡野金次郎翁の顕彰碑で、いわく「山を愛し山界に於ける先駆者を偲ぶ」とあり、針葉樹会の懇親山行にふさわしいものであつた。

山行幹事の佐薙、三井、蛭川さん、「苦勞様でした。（竹中彰 記）

■故・山崎擴さんの蔵書を針葉樹文庫に追加

故・山崎擴さんの蔵書を針葉樹文庫に追加しまし

たので、以下報告します。

山崎さん死去に際して遺族窓口となつた本間山行幹事（S39）が、山崎夫人から山岳書の整理を依頼された。山岳館で活用できないか本間から相談があつたので、蛭川図書幹事（S39）、中村（雅）が訪問し、寄付について申し入れと協議を行つた。その結果、次のように決まつた。

- 持参した山崎蔵書40冊のうちの2冊＝針葉樹文庫本棚のわずかなスペースに収容する。
- 残りの38冊＝山岳館に寄付する。山岳館にて蔵書印を押印して、しかるべき有効活用を図る。

- 例えば①山岳館の一般本棚に収容して来館者の閲覧に供する、②現在建設中の環境省施設「野呂川広河原インフォメーションセンター」に展示する。

- 中村が針葉樹文庫の蔵書リストのアップデーターを担当する。あわせて、中村が（蛭川とともに）図書幹事として針葉樹文庫の担当窓口となることと、塩沢館長の了解を得た。
- また、針葉樹文庫への将来の寄付／追加（＝専用本棚の増設）に関して山岳館の意向を聞いたが、現状では図書コーナーのスペースの関係などで難しいとの回答だつた。

（蛭川隆夫 記）

三月会通信

■平成22年2月15日■

【出席者】佐薙、三井、竹中、佐藤（久）、中村（雅）、

蛭川（記録）

寒雨の中、「氷雨さらさら降るうとままでよ」と集まつたのは、わずか6人。でも、全員が同じ話題に集中できり上上がりました。

▽2月10日の懇親山行（高麗山）思い出話 「月に2～3回は山に行っているとの丸山さんの発言が思い出され、「凄い！ HUHACや会報に投稿してもらいたいものだ」と同感心。高麗山は、近藤恒雄さんのホームグラウンドでしたが、「針葉樹」（復刻版）の編集長としてこの大先輩のお宅を訪問した佐藤（久）さんから、近藤さんに関する面白いエピソードが紹介されました。

▽秋の懇親山行 「箱根方面」としてきましたが、三国山にはほぼ決まりました。ただし、箱根の三国山（1102m）にするか、山中湖近くの三国山（1320m）にするか、幹事が悩んでいます。担当幹事を誰にするかも未定です。

▽中山道談義 先月の三月会記録から始まつた中山道の話題ですが、その後のHUHAC投稿メールを集成して中山道談義をホームページに載せることで、ホームページ幹事の中村（雅）さんが

ら発表されました。ライチヨウに続く談義第2弾です。乞う、ご期待。

▽富士山の語源 「フジ」の語源が話題になりました（アイヌ語起源説は本当かなど）。関連して浅間神社がなぜ「アサマ」「ゼンゲン」と二通りあるのか、使い分けの規則はあるのかなどの疑問が出されました。次回の三月会で、神社博士の遠藤さんや高橋さんから、明解なご説明を拝聴したいものです。

●山行記録

佐薙 2／10 懇親山行・高麗山。雨模様だったが、幹事として雨が降らなくてよかったです。

三井 1／29 三国山（富士山麓）。昭和37年卒の同期6人と、アイゼン練習の予定だったが、雪なし。

2／10 懇親山行・高麗山。

竹中 1／4～5 丹沢・塔の岳（尊仏山荘泊まり）。 「昼から会」 山行（新年恒例行事）。本間他2名と。

2／10 懇親山行・高麗山。山崎さんを偲び総勢11名参加。曇天ながら比較的暖かな中、浅間山でスープ、コーヒーの接待。下山後、茅ヶ崎の「花はん」で反省会。大いに盛り上がる。

2／11 新松田～下曾我ウオーキングと流鏑馬見学。如水会町田支部の行事。曾我梅林へ向けて第一生命ビルの下を歩く。あいにくの雨模様だったおかげで人も少なく、流鏑馬見学には最適。

丸山さんは時間の関係で会えなかつた。↓丸山さんは、この日、海外留学生30人ほどを率いての流鏑馬見学の幹事でした（蛭川）。

蛭川 1／30 三頭山。長澤・三森・佐藤（久）・中村（雅）さんと。蛭川には、いい誕生日祝いとなりました。

2／10 懇親山行・高麗山。

佐藤（久） 1／30 三頭山。下山後、数馬の秘湯蛇の湯「たから荘」へ。風呂場で滑つて足の爪をはがすドジを踏んだ。

中村（雅） 1／30 三頭山。天気が良く、楽しい山行でした。雪はほとんどなし。

2／10 懇親山行・高麗山。

高崎（俊） この2週間余り、例年になく苦しい花粉症に悩まされておりまして、出席出来ません。

昨日は鼻水、今日は喉の痛みと、諦めてじっとしているしかなさそうです。3月の赤岳、登りたいですね。養生します。→高崎さん、早い快復をお祈りします。日程が3月後半なら、佐薙さんも竹中さんも参加されるかもしれませんよ。

岡田 八ヶ岳はなんとかできたらいいですね。

●山行計画

三井 2／25 または 26 御坂山、三方分山。→雪があるかどうか？

竹中 3／5～7 北海道スキー登山（チセヌプリ、シャクナゲ岳）。小野さんの誘いにのつて昨

年に続き2回目。川名さんも参加。

中村 2下旬 阿馬山(中央線沿線シリーズの3回

目)。単独行。

3／? 八ヶ岳赤岳。

高崎さん、岡田さんと。高崎さんの花粉症の症状快復待ち。

■平成22年3月15日■

【出席者】 佐薙、中川、三井、遠藤、高橋、小島、岡田、中村(雅)、西牟田、蛭川(記録)

小島さんが久しぶりに元気な様子を見せてくれました。アルコールはまだ解禁となつてないそうですが、山には早ければ5月の懇親山行(武甲山)から復帰するそうです。

「春一番 かそけき髪を 走り抜く」

(遠藤宗匠)。

▽上原さんと竹中さんが朝日新聞に登場。お二人の記事がひとしきり話題になりました。上原利夫さんは、2月28日の「私の視点」欄に「企業の監査役 労働者と消費者から選任を」と題して寄稿。読みたい方は中村(雅)さんに連絡。

竹中彰さんは、日本山岳会東京多摩支部の初代支部長に就任。同支部設立総会の記事が、壇上でマイクを握る竹中さんの写真付きで2月21日朝刊に載りました。

▽八ヶ岳(赤岳) かねて有志で計画してきたものですが、3／31～4／1(赤岳鉱泉1泊)に決まりました。参加希望者は、幹事の岡田さんに申込みを。

▽7月の北海道日高「剣山」 札幌の小野さんからお説いがありました。参加希望者は、小野さんに3月末までに(宿の確保の関係です)。

▽焼酎談義 いつもお世話をなつている高崎酒造の住所は、西之表市。種子島という住所はないそうです(知りませんでした)。話が発展して、泡盛と焼酎の違い、焼酎はいつどこから日本に持ち込まれたか、蒸留酒は歴史上いつどこで始まつたなどなど。帰宅して『焼酎入門』(幻冬舎)を開いたら、伝来ルートは、対馬領主が朝鮮太宗から、倭寇が南洋諸国から、琉球が交易相手のシャム国から(泡盛の原料は今でもタイ米です)、琉球対岸の福建省からなど、諸説あるそうです。

▽第3回の懇親山行(苗場山) 具体的な日取りを、三井幹事が5月17日(月)の三月会でアナウンスしてくれることになりました。

3／11～12 八ヶ岳(硫黄岳)。新品のアイゼンの使い初め。快調に歩きました。久しぶりのラッセルでしたが、バテずにできました。

西牟田 なし

▽メール参加

竹中 3／13からJAC多摩支部行事で湯沢に出かけるので遅刻が欠席となります。:

三森 前日からヒマ観・宮原さんの記念行事が信州青木村(田沢温泉)であり、帰宅は遅くなるか、他所にまわるでしょうから三月会は欠席します。

●山行記録

佐薙 なし

中川 なし

三井 2／25 三方分山。雪がまだらで、アイゼンを4回履き、外した。富士山はかなり雪が少なかつた。

遠藤 なし

高橋 3／2 鎌北湖。東吾野から歩く。クラスメート4名で。

佐薙 なし

岡田 3／11～12 八ヶ岳(硫黄岳)。新雪が50cmぐらい積もっていた。同行の中村(雅)さんは、強力なラッセルマンだった。

中村(雅) 2／24 藤野～陣馬山～景信山～高尾山～京王高尾山口。中央沿線の山シリーズ(駅から駅のコンセプト)の第3回目。天気よく快適に歩きました。

3／11～12 八ヶ岳(硫黄岳)。新品のアイゼンの使い初め。快調に歩きました。久しぶりのラッセルでしたが、バテずにできました。

西牟田 なし

3／11～12 八ヶ岳(硫黄岳)。新品のアイゼンの使い初め。快調に歩きました。久しぶりのラッセルでしたが、バテずにできました。

西牟田 なし

●山行計画

佐薙 3／31～4／1 八ヶ岳赤岳。

三井 3／21 飯盛山(メシモリヤマ)。昭和37年卒の同期7～8人と。↓さすが三井さん、ノートはルビ付き(蛭川)。

高橋 3／2 岳ノ台(丹沢)。クラスメート5名

と。ヤビツ峠～岳ノ台～菩提～秦野。

岡田 3／31～4／1 八ヶ岳赤岳。

中村（雅） 3／31～4／1 八ヶ岳赤岳。
西牟田 3／31～4／1 八ヶ岳赤岳。佐薙、岡

田、中村（雅）案に同調。

△飯盛山について

「飯」をイイモリと発音する山は、全国に23座あります。たいして、メシモリと発音する山はわずか3座。そのうちの2座は、本来の名前イイモリヤマ／サン／ダケの別称です。清里駅近くの飯盛山は、メシモリ山としか発音しない唯一の山で、三井さんが登るのはこの山だと思います。イイモリは「茶碗に飯を高く丸く盛り上げたような形の山の意で、米食を中心とする日本民族が飯盛形の山に稲の神を祀ったための命名と考えられる」（『コンサイス日本山名辞典』より）。

■平成22年4月17日■

【出席者】 中川、三井、遠藤、高橋、竹中、小島、三森、佐藤（久）、岡田、井草、蛭川（記録）

△常連のお二人が欠席 佐薙さんは、オーション会の甲州街道ウォーカー。いただいたメールによる

と、「5人で甲州街道、大日峠の前後を日帰りで歩く」日と重なりました。東海道ウォーカーに続くオーション会街道歩きの第2弾だそうです。

中村（雅）さんは、九州の韓国岳～獅子戸～新燃

岳に「家内、長男、家内の妹さんと4人で」行く

旅と重なりました。

△「一橋山岳部の軌跡——歴史としての山行記録

選集」（倉知敬） この労作原稿（A4換算で63ページ）の扱いについて、小島編集長から意見が求められました。『針葉樹会報』の、①特別号として一挙掲載、②通常号に4回にわたり分割掲載、③同じく分割掲載後に冊子制作、など諸案の得失が議論されたが、最後は編集長の一存で決すべしとなりました。また、外部への（有料）配布、個人著者名（編集者名）の明記などの提案や意見が出されました。

通常号年間3回の支出に加えて約20万円の臨時支出が予想されるので、新年度の予算に提案することになりました。関連して、会費のこと（徴収状況の開示、徴収／督促方法の改善、免除規定のありかた、滞納者の資格回復規定のありかたなど）などについても発言がありました。

△佐藤（久）さんのカラバタール計画 ロッジ泊まりで安くあげ、エベレストBCまで行く計画。今秋の20日間。中村（雅）さん同行（岡田さんも参加を思案中）。

△もう一人の佐藤さん 之さんが『如水会々報』Apr 2010号の50ページに登場。デュッセルドルフ支部新年会の記事ですが、「ドイツ在住30年超、長編小説の出版を控えた佐藤さんにによるべスピーチ」とあります。やっぱりドイツ語の小説

でしょうか。山登りは出てこないのでしょうか。興味津々です。

△高橋さんの植物標本 20点が「首都大学東京牧

野標本館」に収蔵されました（牧野富太郎の16万点の標本の横に並べられる？）。高橋さん、すっかり在野の植物学者ですね。

●山行記録

中川 なし

三井 なし →なしとは珍しいと思ったら、強風による交通機関の乱れで予定の飯盛山が中止となつたそうです。

遠藤 4／8 高水三山。同期と3人で。→「このぐらいが丁度よいなあ」とノートにコメント。

高橋 3／23 丹沢（菩提～ヤビツ峠～岳ノ台～菩提峠～菩提）。クラスメートと4人で。タチツボスミレが至る所に咲いていた。シカの糞を一袋集め、庭の植木の用土とした。

4／11 高尾山（1号線～頂上～一丁平～戻つてモミジ台の南側巻き道を通り下山）。タカオスマレ、タチツボスミレ、エイサンスマレを見た。竹中 3／5～7 北海道・山スキー行。小野さん幹事の医者グループの行事に、川名さんとともに参加。予定していたチセヌブリ、シャクナゲ岳の

シール登山悪天候で断念。

3／13～15 湯沢スキー行。JAC東京多摩支

部の行事。2日間、岩原スキー場で滑つた。

3／31 多摩丘陵「多摩のよこやまの道」ウォー

ク。如水会多摩支部行事。→横山は、萬葉集にも

歌われたそうです。調べましたので、末尾を参照

*（蛭川）。

4／10 草戸山（町田市の最高峰355m）。高尾山口から歩いた。JAC多摩支部／町田サロンの行事。

4／17 美の山でお花見山行。JAC多摩支部の行事。日帰り入浴後、八王子でJAC打合せ、さらに国立の新緑の宴に合流。→二つの会長職の遂行、まことにご苦労様です。美の山は、秩父・長瀬にある標高420mの山。（蛭川）

蛭川 なし

小島 なし→6月から山行再開の宣言がありました。

三森 2／14～16 八ヶ岳（赤岳）。プロガイドによる雪上訓練（ザイルワークなど）。悪天で登頂はできず。

4／8 夏沢鉱泉。雪の中の露天風呂。翌日は、7年に一度の御柱祭を観光。
高崎 3／27 編枯山（自然学校）～五辻～編枯山（山頂）～五辻～自然学校）。前日の雪のためト レースが消えて、ひさしぶりの雪山を楽しみました。↓奥さんと一人だそうです。

佐藤（久） なし

岡田 4／7～8 八ヶ岳（赤岳）。すこし厳しく感じました。ラッセルなく、梯子も出ていた。

井草 なし →越沢バットレス近くの荒れた山葵田の回復に仲間4人と励んでいます。労働

力を提供すればそれなりの現物報酬もあるそ うなでの、山葵オタクの三森さん、どうぞご参加を。

▽メール参加

中村（雅） 3／30 鳥沢～高畠山～倉岳山～矢

平山～四方津。中央沿線の低山シリーズの第4回

目。単独行。秀麗な富士山を堪能しました。

4／7～8 前夜、美濃戸口から入り赤岳鉱泉泊まり。赤岳（地蔵尾根）を往復。岡田さんと一緒に。無風快晴の好天に恵まれ、快適な雪山を楽しみました。展望もワンダフル！雪山に完全に復活しました。↓岡田、中村さんの八ヶ岳（赤岳）紀行の詳細は「赤岳（八ヶ岳）登頂成功」なる高揚感溢れるタイトルの、4／19付けHUCHA C投稿を参照。

●山行計画

中川 4／27 奥多摩・御前山。会社時代の岳友

と。
三井 5／10 or 11 乾徳山。クラスメート数人と。

高橋 4／27 「奥多摩むかしまち」（氷川から奥多摩湖のある小河内村へ向う古道）をクラスメー ト4名と歩く。

三森 5／8 佐賀・黒髪山（有田の近く、518m＊）。田形さんのアレンジ。友人5人ほどと一緒に。

▽メール参加

中村（雅） 4／20 韓国岳～獅子戸～新燃岳（前

述）。

G W明け 猿橋～九鬼山～高畠山～鳥沢。

*萬葉集（巻20、No.4417）

「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒步かしゆか遺ゆらむ」

防人として派遣される夫との別れをよんだ歌。

《大意》赤駒を山や野に放し捕えかね、多摩の山なみを夫を歩かせて行かせることであろうか

〔日本古典文学大系 萬葉集4〕より）。

*日光の男体山も、別名は黒髪山

『コンサイス日本山名辞典』によると、「奥の細道」の4月1日（旧暦）の条に、「黒髪山は霞か

かりて雪いまだ白し」とある。この黒髪山は、男

体山を指すそうです。同辞典で、佐賀の黒髪山の説明が12行もある（有名な男体山でさえ14行な

のに）。と思ったら、昭和初期からの岩登りのゲレンデ、天然記念物を含む植物の宝庫、源為朝の大蛇退治伝説などなど、黒髪山は歴史と自然の宝

庫ともいうべき山のようですね。アレンジした田形さんに、おそれ入谷の鬼子母神。鬼子母神の正しい読み方を知りたい方は、遠藤さんに聞いてください。

平成22年度会費納入のお願い

平成22年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら会計幹事までEメール／電話にてお問合せ下さい。

◇会費納入先銀行口座

(1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
(2) 口座名 針葉樹会
(3) 口座番号 普通口座 4825647
(4) 振込時 「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S 57)」等記入下さい。

◇会費額 卒業年次によって左記のようになつています。

①昭29年以前の卒業(昭29を含む)	免除
②昭30~42年の卒業	4000円
③昭43~62年の卒業	6000円
④昭63年以降の卒業	5000円

◇幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)

E-Mail Kat.Miyashita@mitsui-steel.com
電話(会社) 03-5544-6925
F a x (会社) 03-5544-6483
(三井物産スチール・第二部門造船鋼材部)

編集後記

▼アメリカの加地さんが、岳人の琴線を奏でそうな燕村の句を送つてくれました。

加地さんはお元気で山も続けられて居られるとのお便りも頂いています。次回はきっとマナスル周遊紀行が届くと期待しています。

加地さんの紀行とは関係なく、石さん

に「私の現役時代」をお願いしました。そうしたら石さんの原稿に、加地さんは石さんの高校先輩との表現が出てきます。お二人の寄稿が並んだのには、何か因縁を感じます。その石さんは原稿をお願いするとき、久しぶりにお電話でお話が出来ました。近況など話しているうちに石さんと私は同じ病院の同じ医師の執刀で、丁度一ヶ月の差で同じ19日に前立腺癌の手術をしていたことが判明しました。これも何かの因縁かなと思いました。

石さんは中公新書ラクレからご自分の闘病体験を『癌を追つて』として出版されています。(小島)

▼OB会報なのに、年に三回も毎号いろいろバラエティ豊かな原稿をよく載せられるなあ、と外部の方に感心されることあります。山岳部という性格もあるでしょうが、これも会員のみなさんが針葉樹会報を大切に思つていらっしゃるからだと、編集幹事としてうれしい限りです。今号もベテランから若手までの多彩な原稿をお送りできました。スペースの都合で掲載できなかつた原稿もありましたこ

とをお断りいたします。

個人的には、相変わらず月に一、三回、週末は奥多摩に行つてワサビ田の作業や山仕事の真似事をしてます。今はワサビ田に作業小屋を造つてあるところで、山の斜面を削つて石垣を積み、平らな地面を造成するところからスタート。柱や板、トタンの波板やガラス窓と、資材はすべて足元の悪い山道を担ぎ上げるんで手間がかかります。地元の82歳になるおじいさんの指導のもとにOKM^{60's}(オクタマ・シックスティーズ)が建築作業をしてますが、山に生きてきた人の知恵にはいつも感心するばかりです。一月に鍬入れをして、七月にはいよいよ総床面積三坪の「わさび御殿」が落成する予定です。(井草)

▼会報の感想やご意見、近況のご報告など、お気軽にお便りをいただけるとうれしく存じます。地方に暮らす方やお体の悪い方など、会に参加しにくい方も、気軽に参加・発信できる場として会報を使いいただきたいと願つています。

(川名)

訂正

117号の27頁、右上の写真(上

高地の帝国ホテル前らしい)で、左端が山崎氏であるのは間違いで、右から3人目が山崎さんでした。お詫びして訂正します。